

爬虫類に関する飼養管理基準の検討に係る業界団体等へのヒアリング
及び現地実態調査結果について

1. 爬虫類に関する飼養管理基準の検討に係る業界団体等へのヒアリング結果

表 1 に示す団体等についてヒアリングを行った。

表 1 ヒアリング先

対象	ヒアリング先	実施状況等
1)動物取扱業者の団体	全国ペット協会	実施済み・本日報告
2)動物取扱業者の団体	日本ペット用品工業会	実施済み・本日報告
3)動物取扱業者の団体	日本爬虫類両生類協会	実施済み・報告済み
4)動物取扱業者の団体	日本小鳥・小動物協会	実施済み・報告済み
5)自治体	東京都	実施済み・本日報告
6)自治体	大阪府動物愛護管理センター	実施済み・報告済み
7)動物愛護団体	特定活動非営利活動法人 地球生物会議 (ALIVE)	実施済み・本日報告
8)動物愛護団体	PEACE	実施済み・報告済み
9)動物愛護団体	NPO 法人アニマルライツセンター	実施済み・報告済み
10)動物園関係者	安佐動物公園	実施済み・本日報告

動物取扱業者の団体【全国ペット協会】

全国ペット協会から、犬猫以外の哺乳類及び爬虫類を取り扱う代表的な会員企業である株式会社ひごペットフレンドリーにも同席頂き、ヒアリングを行った。

○現状について**1) 動物取扱業において現在取扱いの多い種・品種について**

- ・(株)ひご社では、頭数ベースで、ヤモリ含むトカゲ類が全体（爬虫類以外も含む）の4%、ミズガメ、リクガメ、ヘビが1~2%である。多い種はトカゲだとヒヨウモントカゲモドキ（レオバ）、フトアゴヒゲトカゲが比率として高い。ミズガメについてはミシシッピニオイガメ、カブトニオイガメ、リクガメについてはロシアリクガメが主な種である。ヘビ類ではコーンスネークが最多で、コーンスネークも多い方である。

2) 業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について（例：販売時のケージサイズ、動物カフェでのふれあいなど）

- ・(株)ひご社の話ではないが、触れ合いの場で小学生以下が、近くにスタッフがいない状況で自由に触れてしまう状況はどうなのかと思う。また、触る前後の消毒の不徹底が懸念。

○犬猫以外の哺乳類及び爬虫類に関する飼養管理基準について

- ・種類が多種多様なので、法令や基準などを設けた後、各自治体担当者が適正に指導管理できるのかに疑問を感じる。
- ・温度計の設置、ケージの基準がメインになると思う。
- ・不妊治療、去勢に関して、小動物、爬虫類の避妊、不妊手術ができる獣医師がほぼいない。
- ・ケージサイズについては現場へ多大な影響がでることも考えられる。慎重な検討が必要だろう。自治体職員も動物種の見分けができづらい状況も考えられる。また生理や習性をふまえ科学的な根拠をもとに決められるものでなければ指導にも困るのではないか。

以上

動物取扱業者の団体【日本ペット用品工業会】**○爬虫類に関する飼養管理基準について**

- ・変温動物である爬虫類にとっては広さよりも温度管理のほうが重要である。
- ・犬猫用、鳥用、小動物用に分けて飼養管理基準が設けられ、その上でカテゴリーごとに資格を取るべきという趣旨であれば、妥当だと思う。
- ・爬虫類は種が多く、種ごとの違いがあるため、大枠の方向性を定めることはできても、具具体化するのは難しいと思う。また自治体が現地確認した際に、飼養管理基準に沿って判断する必要があるため、判断しにくい基準とならないよう留意が必要。

自治体【東京都】

○現状について

- 1) 動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の指導・遵守状況について
 - ・清掃が不要という認識のオーナーが多く、臭い、汚いといった飼育環境の苦情を受けることがある。
 - ・飼養施設の臭気について、具体的な数値規制があると指導しやすい。
- 2) 業種、業態、動物種ごとの飼養保管方法に関する懸念・指摘について
 - ・小動物の販売イベントでは給水容器が無いことが苦情になる。例えば、1時間程度のイベントであれば給水器具の備え付けはしなくても良いのか、どの程度まで強く指導できるのか迷うので、明確にしてほしい。
- 3) 人畜共通感染症等、人と動物のふれあいに関する課題について
 - ・動物福祉の観点からも、感染症予防の観点からも野生動物由来の動物のふれあいは禁止すべき。

○爬虫類に関する飼養管理基準について

- 1) 当該基準に記載すべき事項について
 - ・店舗あたりの生体数が多いため、1つずつ監視するのは不可能であり、それを考慮した基準を策定してもらいたい。
 - ・イベント販売における爬虫類販売者のプラスチックケージの積み重ねを規制してほしい。
 - ・犬猫のように、飼養施設に輸送後販売する事業所において2日間の目視による健康状態のチェックが必要なことを盛り込んでほしい。（移動）
 - ・小型哺乳類と爬虫類の同一区画での販売、展示、保管を規制してほしい。（適正な飼育環境の差、捕食者関係等を考慮）
 - ・水場を必要とする動物の水場の基準を作ってほしい。
 - ・基準省令第2条七号「野生動物由来の動物を業に供する場合」の適正な種の選択について具体的に記載してほしい。あわせて「必要に応じた馴化措置」を具体的に記載してほしい。
- 2) 当該基準が策定された場合に、自治体での運用上の懸念について（現時点では新たな飼養管理基準案が示されていないため、想定）
 - ・蛇では体長の正確な確認が困難であるため、それを考慮した基準とする必要がある。
 - ・蛇は柔軟であり、ケージは狭くないという事業者からの主張が予想される。事業者に説明できる科学的な根拠をもってケージサイズの基準を策定してもらいたい。
 - ・犬猫のような運用指針を作成してもらいたい。
 - ・トカゲやヘビの種類を見分けられる監視員は少ない。代表種に該当するかどうか判断しないといけないような基準は、監視不可能。

- ・ 詳細な基準が作りこまれると登録審査や実地検査に膨大な時間を要する懸念がある。
- ・ 種を限定されると、そのほかの種があまりに多いので指導しにくい。うちのは種類が異なると言って事業者が従わないかもしれない。
- ・ 給餌方法、給水方法、温度、照度、隠れ場所の有無、床の素材など専門家による正しい生理生態、適正な飼育環境を情報提供してほしい。

動物愛護団体【特定活動非営利活動法人 地球生物会議（ALIVE）】

○現状について

下記のような問題事例を確認している。

(販売業)

- ・ 一人当たりが取扱う動物種や頭数が多く、動物が不適正飼養。動物取扱責任者が複数店舗を兼務し、実質の常勤者不在等の事例がある。
- ・ 特定動物の一般飼養禁止前に販売されていたワニなどの特定動物が、長期間にわたり運動したり泳いだりできない狭い水槽で飼育、展示されている。
- ・ 即売会などにおいて、ヘビや爬虫類を、小さな食品カップに詰め込んで販売していた。
- ・ また、輸出規制がある日本固有種、レッドリスト掲載種の爬虫類まで販売されていた。
- ・ (販売自体も禁止すべきであるが、購入者が問題意識なく購入し、輸出規制があることを知らずに取扱う可能性があるため、個体情報表示に明記し、重要事項説明事項にも含める。)

(展示業)

- ・ 屋外の池や水槽などにおいて適切な水温が維持されておらず、水質管理にも問題がある。
(例えば、水槽で小型のカメを少数飼育する場合、適切な水温に設定されたオートヒーター や水質管理用の交換ろ過材などが販売されているが、そのような設備がない屋外池もある。)
- ・ 爬虫類の販売業者、展示業者ともに、コレクター、ホーダー要素が強い多頭飼育業者が散見される。
- ・ 短期間に移動を繰り返し仮設の施設等で触れ合い・展示を行う環境は、「動物の生態、習性及び生理」に反する上、自治体が事前に施設基準の適否判断ができず、事後の指導も困難。
- ・ 動物園を含む動物の触れ合い展示では、リクガメに子どもを乗せたり、触り放題にしていることがある。(閉店時には、身動きがとれないケースに入れられてリクガメがもがいていたのを確認している。)

○爬虫類に関する飼養管理基準について

1) 当該基準に記載すべき事項について

下記のような法的効果を伴う基準を設定する

- ・ 飼養展示施設の基準(体長体高、運動能力、行動範囲を踏まえて高密度にならないように)
- ・ 従業員員数は飼養可能な上限値。〈多頭飼育、過密飼育防止〉
- ・ 屋内外問わず飼養施設(展示場を含む)への温度計及び湿度計並びに空調設備の設置。
- ・ 種ごとの生態、習性及び生理等を十分理解し、本来の生息環境(温度、相対湿度、光環境、樹上棲、水棲等の生息形態)とかけ離れた状態、行動要求が満たせない状態にしないこと。

- ・清潔、静粛の保持。
- ・感染症のまん延防止（個々に収容できる隔離場所の確保）。
- ・動物の展示について、「顧客等による接触」が伴わない業態は休息設備への移動の確保、展示時間が6時間を超えるごとに展示を行わない時間を設けること。
- ・原則としてふれあいに使用しないこと。リクガメ等に子どもを乗せることも禁止する。
- ・輸送に関し、移動後の健康確認履歴の記録保持、輸送に際しての休養確保の義務付け。
- ・動物の休憩時間、輸送時間、休養期間についての定量的な指標の設定。
- ・移動販売・移動展示の禁止。
- ・生涯出産回数の繁殖台帳への記入義務化、雌の交配年齢、出産回数の規定。
- ・野生動物の利用制限
- ・レンタルペットの規制
- ・動物全種の個体ごとの帳簿備え付け（多頭飼育、過密飼育防止の観点からも必要）
- ・日本固有種、レッドリスト掲載種の捕獲及び販売をしない

動物園関係者【安佐動物公園】

○現状について

- ・JAZA 加盟の動物園において、飼養管理基準は遵守できている。
- ・JAZA ガイドラインは、今後このような基準にそった形で飼育できるようにするという内容も含まれており、特に建物関係などは建て替える際にガイドラインに準拠する意図なので、現時点ですべて守られているという状況ではない。
- ・JAZA ガイドラインについて、一部の爬虫類は存在するが、すべての種類について細かくあるわけではない。ガイドラインについては、日本動物園水族館協会のホームページで一般に閲覧することができる。
- ・動物園では爬虫類を診る獣医師も設置する流れにあり、診られる人が少ないから診せられないという流れではない。
- ・動物園でのふれあいについて、コロナ禍でふれあいを中止したところ、ふれあいをしていたときの方が病気にかかる率が高かったというデータもある（テンジクネズミ、ヤギ）。爬虫類で同様の事例報告はないが、動物一般的な傾向だろうと考えられる。
- ・爬虫類はサルモネラ菌を持っていることが多く、爬虫類に触れた手で食事をするなどして感染する危険もある。
- ・爬虫類のふれあいについて、哺乳類よりもよりストレスを受けやすく、病気になりやすいと考えられる。哺乳類よりも体調や行動の変化がわかりにくいという点も問題である。
- ・爬虫類の健康状態を見極める方法として、哺乳類のように行動で判断するのは難しく、形態的にチェックすることになる（例えばカメの頭の裏の首の筋肉が落ちていないか、食欲は落ちていないか、ウロコや目の見た目の美しさなど）。
- ・爬虫類カフェでは客が見やすいように展示されており、爬虫類が隠れられない場合がある。動物福祉の観点からは居たい環境を選択できることが考え方の一つなので、隠れたいときに隠れられる場所がある展示方法となるよう規制しうる。

○ケージサイズについて

- ・ ヘビはとぐろを巻くので体を伸ばせなくとも大丈夫と言われるが、それはその環境によるストレスで死なないという意味である。囲いがある以上制約はあるが、幅や長さが十分でなくとも3次元的に対角線が体長を超える、枝に沿って伸ばせる環境があるということが現実的な落としどころになる。
- ・ (ヒアリング後の情報提供)「ほぼ全てのヘビが直線に近い姿勢を取る欲求がある」という考察がされていた (Warwick et al. 2019, Journal of Veterinary Behavior)。決定的証拠というより1つの解釈という段階とは思うが、こうした科学的根拠を重ねることで、これまでの飼育環境や慣習が否定されることになるのは、欧米でも同じようである。
- ・ カメ、トカゲの場合は行動に沿って体の大きさの何倍という基準になると思う。例えば地中に産卵するカメは穴掘りをするので深さも必要であり、床材を敷く場合、種(とサイズ)にもよるが20~30cmの深さにするなどの基準がある。広さよりも高低差や温度差、日向日陰、水辺など、自ら体温等をコントロールできる環境の多様性が重要になる。
- ・ ケージが広いとカメやトカゲが衝突すると言われるが、ガラスを判別できないために衝突するので、プラスチックや木など向こう側が見えない素材にするとか、ガラスにテープを張るなどで解消できる飼育側の努力義務が必要である。

○爬虫類に関する飼養管理基準について

- ・ ペットショップ、ブリーダー、動物園などの動物取扱業を一律に規制するのは難しい。特に動物園は種の保全に努めており、ペットショップなどでの繁殖を防ぐ基準を動物園に適用するのは難しい。
- ・ 定量的なガイドラインを作るに当たってはできるだけ科学的な情報がある種、項目を選んで、数字の科学的根拠を明記してほしい。
- ・ 爬虫類のウェルフェアやガイドラインは先進的な欧米でも進行形の分野であるため、一度策定したものを見直す必要がある。
- ・ 規制を作ることはよいと思うが、行政職員が監督しやすい、分かりやすく指摘しやすいガイドラインにしてほしい。
- ・ ブリーディングの際に、種間雑種や地域個体群間の交雑をしない規制が必要。また、同様の理由で野外に飼育個体を放たないことを明記してほしい。

2. 爬虫類に関する飼養管理基準の検討に係る現地実態調査結果

表 2 に示す施設等について現地実態調査を行った。

表 2 現地実態調査先

対象	現地実態調査先	実施状況等
1)爬虫類を扱うペットショップ	爬虫類販売店 A	実施済み・本日報告
2)爬虫類を扱うペットショップ	熱帯俱楽部	実施済み・本日報告
3)爬虫類を扱うブリーダー兼ペットショップ	爬虫類販売店 B	実施済み・本日報告
4)爬虫類を扱うブリーダー兼ペットショップ	ガーベル	実施済み・本日報告
5)爬虫類を扱うブリーダー兼ペットショップ	VIPPER はちゅコレ	実施済み・本日報告
6)爬虫類を扱うブリーダー兼ペットショップ(移動販売)	terra(出展先:BLACK OUT/アクアリウム東京)	実施済み・本日報告
7)爬虫類を扱うブリーダー兼ペットショップ(移動販売)	爬虫類ブリーダーA (出展先:BLACK OUT)	実施済み・本日報告
8)爬虫類を扱うブリーダー(移動販売)	爬虫類ブリーダーB (出展先:とんぶり市)	実施済み・本日報告
9)爬虫類を扱うブリーダー(移動販売)	ももれっぷ(出展先:とんぶり市)	実施済み・本日報告
10)爬虫類を扱う展示販売会	BLACK OUT (主催者:OZ)	実施済み・本日報告
11)爬虫類を扱う展示販売会	アクアリウム東京	実施済み・本日報告
12)爬虫類を扱う展示販売会	とんぶり市 (主催者:ぶりくら)	実施済み・本日報告
13)爬虫類を扱うホームセンター内ペットショップ	ホームセンター内ペットショップ A	実施済み・本日報告
14)爬虫類を扱うホームセンター内ペットショップ	ペットプラザ(コーナン三鷹店)	実施済み・本日報告
15)爬虫類を扱う動物カフェ	はちゅカフェ	実施済み・本日報告
16)爬虫類を扱う動物カフェ	Piccolo Zoo	実施済み・本日報告
17)爬虫類を扱う動物カフェ	横浜亜熱帯茶館	実施済み・本日報告
18)爬虫類を扱う触れ合い施設	株式会社 ZOOKISS 施設	実施済み・本日報告
19)爬虫類を扱う観光動物施設	観光動物施設 A	実施済み・本日報告
20)爬虫類を扱う移動動物園	移動動物園 A	実施済み・本日報告
21)爬虫類を扱う卸売	浅田鳥獣貿易株式会社	実施済み・本日報告
22)爬虫類を扱う卸売	川原鳥獣貿易株式会社	実施済み・本日報告
23)爬虫類を扱う卸売	レップジャパン	実施済み・本日報告

爬虫類を扱うペットショップ【爬虫類販売店A】

○イベント全般について

- ・最近イベントが増えており、すそ野が広がると悪い部分も増えてくることを懸念している。
- ・移動のストレス軽減のため、イベントの前1週間程度絶食させることは業者間では通常である。絶食させる前には餌を強化し、イベント後も様子を見ながら餌の量を調整するなど配慮が必要であるが、イベントに毎週参加する業者もいて、適切な管理ができないのではないかと思う。実際に「来週もまたイベントだから」とイベント時の容器に入れたままの状態も見たことがあります、衰弱や福祉面など懸念している。
- ・トカゲ・ヤモリはイベント中も途中で霧吹きし、水棲カメも水替えをするのが良い。

○イベント時のケージサイズ等について

(爬虫類全般)

- ・イベント時は数日前に発送することがあるが、我々は1週間も狭いケージに入れっぱなしにすることはない。他の業者も長くても5日以内にすべきである。
- ・上の個体が動くと気になるので、食品カップには床材を入れるもしくは底面に色をつけて、重ねた際に上が見えないようにするのが良い。

○輸送時のケージサイズ等について

- ・ヘビの輸送時には、ケージサイズはとぐろを巻けるサイズで良い。
- ・水棲カメの輸送時は水を入れないで、ミズゴケ・クッション・新聞紙などを詰めておく。容器の素材は、カップでもプラスチックケースでも良い。
- ・リクガメの輸送時もクッション・新聞紙などを詰めておく。

○日常的な（イベント・輸送時を除く）ケージサイズについて

- ・普段の飼育の際、ヘビ以外に関しては、きちんと体が伸ばせるサイズが必要。
- ・ヘビは普段とぐろを巻いた状態の3倍程度の広さがあれば、食べ物を捕食・消化・排泄する際も問題ないと思われる。

○その他設備について

- ・床材の種類は一長一短であり、適した床材はケースバイケース。
- ・水は汚れていない方が良い。水を替えたら、爬虫類は真っ先に入りに来る個体もいる。
- ・爬虫類の飼育環境について、爬虫類に詳しくない自治体が指導するのは難しい。水場の確認は糞で汚れていないか、干上がっていかなければチェックしやすい。
- ・霧吹きは開店時と閉店時をしているが、水浴が必要でない種にも水が入った容器（水入れ）を入れている。
- ・水入れの形状は個体に合わせたものにしなければならない。登ることが苦手な個体に対して、縁の高い水入れを使用しても水があることが認識できず水にたどり着けない。

○飼育環境について

- ・温度管理について、イベント時はいつもより代謝を落とすために温度を少し下げる。適切な温度を個別に定めるのは種数が多すぎて難しい。
- ・紫外線ライトはヘビ、ヤモリは基本的にいらない。カメ類・トカゲ類も数日なら不要である。
- ・「温度勾配があり、暑い場所から逃げられるスペースがある」くらいの基準に留めるのが良い。温度勾配とは一般に「〇°C～〇°Cで飼いましょう」と言われているものの上限と下限のイメージである。
- ・木を入れる必要があるかどうか、種ごとにいうのは難しい。大きなカテゴリーごとに考える必要がある。樹上性の種には止まり木を入れる。止まり木上でも温度勾配ができるようにし、自由に移動できるようにする。止まり木はライトに最も近い所まで行けるようにする。
- ・シェルターの有無を基準として記載するのは難しい。環境に慣れないとずっとシェルターに入りっぱなしの個体もいる。詳しい人でないときちゃんと水を飲んでいるのか、餌を食べているのか等も分からず、健康状態を把握できない状況になりかねない。
- ・爬虫類は明るい部屋でも勝手に寝る。ヘビに関しては瞼がないので、動いていなければ寝ているかもしれない。

クラークトゲオイグアナ（樹上性）	ハルマヘラパイソン（樹上性）
ブチイシガメ（水棲）	ヒガシヘルマンリクガメ（陸棲）

爬虫類を扱うペットショップ【熱帯俱楽部】

○施設の運営について

- ・爬虫類・哺乳類でそれぞれ 100 頭程度。主にトカゲ（ヒヨウモントカゲモドキ 20~30 四）、ヘビ、リクガメ、カメレオン、ヤモリ等。
- ・モルモットやリクガメ等、触れ合い動物園を行うこともある。
- ・スタッフは全部で 10 名。1 日 4~5 名（休日 6~7 名）程度。

○現状について

- ・ケージサイズ・設備について、ヒヨウモントカゲモドキの場合、最低限 20cm 角が必要である。シェルターをヒヨウモントカゲモドキ全個体のケージ内に付けている。ヒーターはケージ内ではなくケージ外に設置し底面の 20%~30% を温めている。紫外線は不要だが、普段から顧客から見られ慣れることで、顧客の飼育環境下でそれ以上ストレスを感じることがないようにという状況を作るため、シェルターを設けたうえで様々な環境に慣らす為に明るくしている。
- ・給水について、ヒヨウモントカゲモドキの場合、水は一日数回 1~2 時間で乾くような水量を霧吹きしている。個体にかけないように壁などのケージ全体にかける。また、ウェットシェルターを使用してシェルターの中の湿度を高めている。
- ・給餌について、ヒヨウモントカゲモドキの場合、給餌回数は個体の大きさによって変えている。個体が大きくなればなるほど給餌頻度は少なくなるが、大体週に 2~3 回である。ヘビの場合、週に 2 回程度、中でも大型種であれば週に 1 回程度である。
- ・健康管理について、何か異常があったらかかりつけの獣医師に診てもらう。健康診断は、触られることがストレスになる個体もあるため、受けていない。また、具合の悪い個体はバックヤードで管理している。
- ・イベント出店時のケースサイズについて、爬虫類・両生類・虫類全般においてイベント時は個体の大きさもあるが狭過ぎず広過ぎずの容器に入れる事を常にし、最低 15 cm × 10 cm × 10 cm ~ 20cm × 15cm × 15cm のプラケース用の容器に入れて出品する。また、大型個体は更に広いケースを用いている。販売時にそのまま渡しても何日間か飼育可能な広さのケースに入れている。プラケースに空気穴はすでに開いているが、さらに必要な場合は側面にも空気穴をあける。ケースの高さについて、個体と種類にもよるが最低限 10~15cm あれば、空気穴によって空気の流れを作ることができるため蒸れない。爬虫類・両生類の場合、ケース内が蒸れてしまうことは良くない。
- ・トカゲ（ヤモリ含む）の場合尻尾が曲がったまま容器に入っていることは問題ない。狭そうに見える場合でも床材もあり、潜るようにしている為、個体に密着しておりシェルター内にいるような環境になっているため、シェルター等何も設置しない広いスペースにいるより落ち着いている。
- ・輸入時の 1~2 日程度であれば小さな容器で管理しても良いが、店舗で 1 週間以上小さな容器で管理したり、そのままイベントに連続で出品することは良くない。
- ・イベント時の設備については、客に個体を見せるためにシェルターを入れていない。床材（実験動物で用いられている紙の床材やヤシガラ）は入れている。爬虫類の場合は床材を入れていると床材に潜ることでシェルターダイアリになるため、イベントには適していると

思う。その他樹上性や半樹上性の生き物はケージ内に登れるような枝を入れて展示している。

- ・イベント時の給水についても店舗と同じく霧吹きで給水している。
- ・イベント時の給餌については、輸送1~2日前から店舗に戻るまで絶食する。当日移動直前の給水も吐き戻しを考慮して行わない。ただし消化の早い種類に関しては前日まで給餌し、輸送当日のパッキング前に排泄が終わっている状態にしている。
- ・店内での捕食、被捕食に関する展示方法の工夫について、基本的には互いが見える光景が当たり前になるようにしているが、接触はさせない。店内にはヘビと猛禽類がいるが、色々な動物を飼育している家に買われて行ってもストレスを感じにくくするため、普段から互いが見える状況がストレスにならないように慣らしている。
- ・店内の触れ合い時には、動物が舐めても問題のない消毒液で手指の消毒の対応と、必ずスタッフが帯同する。就業時間中に動物が触られる時間は、スタッフが給餌の時に触れ合う時間も合わせると1日1個体あたり5分~10分程度である。

	
ヒョウモントカゲモドキ	ボールパイソン
	
コーンスネーク	エボシカメレオン

爬虫類を扱うブリーダー兼ペットショップ【爬虫類販売店B】

○現状について

- ・現在取扱いの多い種はトカゲ類ではフトアゴヒゲトカゲ、ヘビ類はボールパイソンである。カメ類はニオイガメ類やロシアリクガメ、ギリシャリクガメが多い。
- ・取り扱っている野生個体と繁殖個体の割合は1:1程度である。
- ・ヒヨウモントカゲモドキは他種と比べて圧倒的に飼いやすい。他種と比べて飼育しやすさが別次元である。
- ・トカゲ類ではフトアゴヒゲトカゲの飼養方法を応用して他種も飼育できる。
- ・ヘビ類ではコーンスネークの飼養方法を応用して他種も飼育できる。
- ・水棲カメはクサガメ、イシガメ、ニオイガメ系が多い。
- ・リクガメはケヅメリクガメがかなり大型であり、ギリシャリクガメ、ロシアリクガメ、ヘルマンリクガメがベーシックな種である。

○イベントや輸送時のケージサイズ等について

- ・常設店舗を持たず、イベントのみ参加している人は生態と合っていない設備だったりすることがある。頻繁にイベントに出ていると生体にストレスがかかってしまう。イベントによって生体をローテーションできていると良いかと思う。
- ・イベントは輸送が一番負担になるのではないか。イベント時は温度を低めに設定しており、水はあげているが餌は与えていない。
- ・ヘビ類は体の一部がどこかに接している方が落ち着く種が多い。体サイズの1.5倍程度の大きさがあれば良い。
- ・トカゲ類はよく動き回るため、鼻を擦らない広さが必要。二つ折りのような状態も見かけるが良くない。ただ、種類によって違うので一概には言えません。
- ・リクガメは甲羅4つ分の底面積が必要。
- ・水棲カメ類の陸場は甲羅2つ分の底面積があれば良く、別途泳げる水場が必要。この場合は泳げるスペースが甲羅の二倍くらいあれば問題ない。
- ・ヤモリ類はある程度高さもあり、体が伸ばせる程度の広さが必要。尾は伸ばせなくとも良い。
- ・輸送時の容器は踏ん張った時に体高より低いと狭いといえる。
- ・移動用の狭い容器に入れる時間は3日以内くらいが目安である。ライトが必要な種については別途注意が必要である。
- ・熱帯由来の種は寒い時期や場所のイベントには連れて行かないようにしている。
- ・輸送等、環境が変化した当日に餌を与えてはいけない。

○日常的な（イベント・輸送時を除く）ケージサイズについて

- ・ヒヨウモントカゲモドキは床面積30cm×30cmくらいは必要。
- ・リクガメは規格水槽サイズ(60×30cm)か大きくなれば90cm水槽程度(90×45cm)が必要である。
- ・水棲カメは床面積60×45cm水槽くらいは必要。

- ・ヘビ類は体が硬い種、柔らかい種で異なるが、とぐろを巻いた床面積の3倍くらいが基準となる。
- ・ヤモリ類は尾まで伸ばせる程度の広さが必要。

○その他設備について

- ・ヒョウモントカゲモドキは最低限シェルター、ヒーター、水入れを設置する。

○飼育環境について

- ・不衛生にならないように気を付けている。爬虫類は見た目の汚れはわかりにくいが、匂いや店内の清掃には気を付けている。
- ・清掃の頻度はレイアウトによって異なるが、週に2~3日は清掃している。毎回レイアウトを全て崩して清掃するわけではない。崩さなくても良いようなレイアウトにしている。全部を崩して洗うのは月1回程度。
- ・水入れは糞などで汚れたらすぐに換えている。水交換は毎日。ヘビなどは汚れていなければ2日に1回程度。
- ・目で見て動きがないと物を認識できない種もいる。そのような種の場合、水にエアレーションを入れたりしている。カメレオンには水を垂らして飲ませることもある。
- ・店休日はライトを付けず、温度管理のみしている。
- ・お客様には店のかかりつけ医を紹介している。また当店はお客様から相談を受けることが多い。
- ・体調不良を見た目によって判断するには、骨が浮いていないか、糞の質や色がおかしくないか、目が落ち込んでいないか等を確認すると良い。

	
ヒヨウモントカゲモドキ	ポールパイソン
	
ヒヨウモントカゲモドキ (プラケース 約 15×10×3~4cm 程度)	インドシナウォータードラゴン
	
ヨーロッパヌマガメ	フトアゴヒゲトカゲ

爬虫類を扱うブリーダー兼ペットショップ【ガーベル】

○施設の運営について

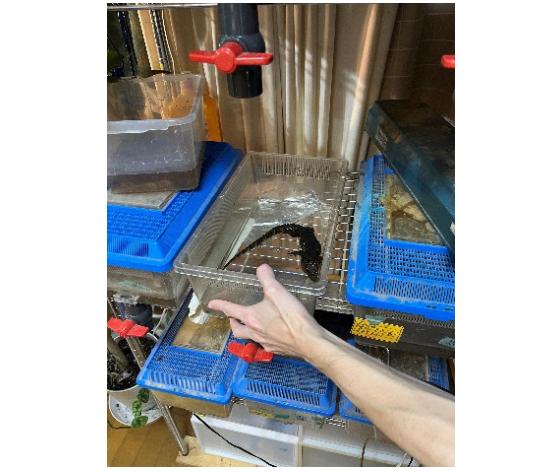
- ・動物種：ヒョウモントカゲモドキ、カナリアカナヘビ、ジャイアントゲッコー、ハラガケガメ、トウブドロガメ、ワニトカゲ、キボシイシガメ、アメリカハコガメ、セマルハコガメを主に取り扱っている。
- ・世話をしているのは自身1名のみ。

○現状について

- ・必要なケージのサイズ、構造、同一ケージ内に同居する頭数は爬虫類種や個体、年齢によって異なる。
- ・幼齢期やメス同士であれば多頭飼いしても問題がない場合もある。雄雌が判別した後であってもある程度密度が高ければかえって争いが起きないこともあり、はじめは多頭飼育しつつ様子を見て喧嘩をするようであれば離すという流れを、個体を見ながら行う。
- ・餌の採り具合を把握しやすいため基本的には個別飼育している。
- ・給餌について、基本的には週2、3回、成長期や妊娠中の個体、夏場などは毎日与える場合もある。
- ・給水については、→水入れから水を飲む種類に関しては常に新鮮な水入れに水をはっておく。樹上性の種類に対しては毎日霧吹きしなければならない種類もいるし、1週間に2、3回霧吹きで問題ない種類もいる。
- ・霧吹きでの給水か飲み水としての給水かについては、水滴からしか飲めず容器から飲むことができない種類（壁に這っているヤモリ等）がある。
- ・光環境について、種によって光の加減も変わってくる。暗い場所を好むため紫外線を必要としない個体には紫外線を当ててはいないが、紫外線を必要とする種類には短時間であっても強制的に紫外線を当てている。一般的に紫外線が必要ないとされる種類であっても、紫外線を付けたほうが調子が良くなる場合もある。
- ・温度について、種類や季節に応じてエアコンや個別にヒーターなどをつけている。保温や冷却が必要かどうかは爬虫類種によって異なり、なくても問題ない種類もある。冬場はヒーターがないと餌をあげた際に消化不良を起こして吐いたり食滞を起こして死んでしまう種類もある。
- ・衛生管理について、糞があったら片付ける等の糞尿への配慮だけでなく、換気も非常に重要である。エアコンを稼働させている期間は定期的に換気をする程度に留めているがそれ以外の時期は常に換気をしている。また扇風機等での空気の循環も行っている。
- ・配置への工夫について、（樹上性の生き物等）ヘビに対して警戒する種類はあるが、ヘビは飼育しておらず、その他互いに敵対するような種類を視界に入る場所で飼育していないため特段気を付けてはいない。となり合わせていたとしても紙等により完全に仕切りがあればそれぞれのプライバシーは担保される。またガラス面に映る自分の姿を他個体と認識してストレスになる場合もあるため対策として映り込みがない素材の飼育容器を使うこともある。
- ・ヒョウモントカゲモドキが食品カップ等で積み重なっているような状況は特段問題ないだろう。食品カップで並べている状態では、一時的に多少興奮するような場面はあるものの、ずっと興奮状態が続くということは少ない。仮に興奮状態が続くようであれば仕切りを用いて

視界を遮れば問題ない。

- ・食品カップが縦に積まれている状態でも問題ない。大抵食品カップの底に何か敷いてある場合が多いため、下の個体からは上の個体は見えない。
- ・ケージ内に必要な設備については、種類や個体の性格による。例えば蓋に関しても、保湿されていないといけない種類もあるため、種類によって網製やガラス製などで使い分ける。また一方で、ある程度順化させることで本来適していない環境に多少は耐えられるようになる個体もいる。
- ・繁殖可否の判断（年齢や状態等）において、負担のない年齢と体格、生体の状態であるかを見る。
- ・1日の作業時間について、季節にもよるが、水替えで1時間半、給餌、給水も加えると一日あたり4、5時間ほどかかる。一方全く手を付けない日もあるため、平均すると1日2、3時間。さらに冬眠時期は何も作業しないことも多いため、年で平均すると1日1時間ほど。
- ・販売は主にイベントでの出店ショップへの卸売である。ペットショップやイベント会場への輸送時間について、大体1時間以内のイベント会場やショップが多く、長くても1日以内。
- ・移動時のケージはイベントで販売しているような食品カップで運ぶ場合が多い。また、小さいトカゲは洗濯ネットにちぎった紙を入れ、10匹程度まとめて入れる場合もある。紙袋に入れて電車で輸送している。

	
カメ（ハラガケガメ）	ジャイアントゲッコー
	
カメ（セマルハコガメ、アメリカハコガメ）	カメ（温室）
	
ワニトカゲ	ヒヨウモントカゲモドキ

	
飼育スペース（温室）	飼育スペース
	
飼育スペース	飼育スペース
	
飼育スペース	飼育スペース

爬虫類を扱うブリーダー兼ペットショップ【VIPPER はちゅコレ】

○施設の運営について

- ・取り扱い数について、爬虫類全体で 1000 匹前後。両生類を合わせると数千匹の時もある。
- ・主に繁殖しているものはコーンスネーク。親個体が 20~30 匹、生まれた子供が 200 匹以上。販売用在庫として 50~60 匹程度。早い個体だと生後 2 か月程度で販売用となる。ヒョウモントカゲモドキは親個体が 20 匹、販売用が 100 匹前後。
- ・スタッフは 3 名。必要に応じて臨時スタッフが入る場合もある。

○現状について（爬虫類）

- ・販売用個体に使用しているケージは市販されているレプタイルボックス（幅 20 cm × 奥行き 30 cm × 高さ 15.5 cm）とレプタイルボックスワイド（幅 40 cm × 奥行き 30 cm × 高さ 15.5 cm）。ボールパイソンやコーンスネーク等の一般的に流通しているようなヘビに関しては、繁殖用個体も含めて全般的に、「とぐろの 3 倍以上のスペース」が最低限の規格であると、業界では認識されている。ヘビは狭いところに落ち着くという性質があるため、とぐろの 3 倍以上のスペースと、全身が水に浸かれて狭い水の中でぎゅっと安心できるような水入れを設置しているとよい。
- ・ヘビの場合高さはあまり求められていないが、ヘビであれば全て高さが低くてもよいということではない。例えばグリーンパイソンのような樹上性の種類には、高さがしっかりとあり、その中に立木を入れそこにとぐろを巻けるようなケースが良い。
- ・水入れは、100 均の食品用タッパーに機械で穴を開けており、5cm × 3cm × 1.5~2cm 程度のサイズのものを使用している。毎日水を交換していても水の中で排泄してしまうことも多く、その都度水の交換をしている。
- ・イベント時には主に横 15cm × 縦 11cm × 高さ 7cm のケースを使用している。仮にその狭いケースであっても、温度管理や給水等の最低限の管理さえしていれば健康的なヒョウモントカゲモドキなどの成体であれば数か月死ぬことはない。しかし、当然そのような管理は理想的ではないためイベント終了後は速やかに飼養施設に戻り生体を通常のケージへ戻している。
- ・給餌、給水の優先度としては水、餌といった順である。樹上性のヤモリやカメレオン等、習性的に川や湖がなく雨水や朝霧を飲んでいる種類は動いている水や壁についている水の方が嗜好性が高いため、霧吹きで壁や体に吹きかける形で毎日給水している。ヒョウモントカゲモドキやコーンスネークも可能な限り毎日水を変える必要がある。
- ・給餌は、肉食系、雑食系のヤモリ・トカゲ類に関しては、幼体は 1 日置きもしくは毎日給餌、大人の個体は週に 1~2 回給餌となる。リクガメやイグアナ等の草食系の生き物については、野菜はエネルギー変換が難しいため、大人の個体であってもほとんど毎日の給餌が必要である。（マウスを食べる）ヘビは、幼体で週に 2 回の給餌、大人の個体で月 1~2 回、もしくは数か月に 1 回の頻度で給餌が必要である。一般的に販売されるヘビは大きい餌を一気に食べ、消化に時間がかかるため、毎日の給餌は望ましくないことが多い。
- ・イベント前には、種類によっては温度の低下による消化不良を防ぐため、1 週間~2, 3 日前から絶食させる。
- ・ヘビの場合、生まれて最初の脱皮をしてから給餌を開始するが、初めから素直に餌を食べる個体はほとんどいない。餌を食べててくれるよう 待つか、「アシスト給餌」といって口に

くわえさせて飲ませるか、それでも食べない個体は「強制給餌」で胃の部分まで押し込む方法で給餌する。販売基準としては、自然と自分でピンクマウスSサイズを食べてくれるこことを目安としている。幼体が餌を食べているかどうかはケージ外部に日付とともにメモしている。

- ・温度について、基本的には26~28°Cを保ち、個体によって足りない部分はヒーターで調整している。バスキングライトによる保温方法をとる生体もあり、木の枝を設置し、ライトに近く当たり温かい場所と、ライトから隠れることのできる場所を用意している。
- ・光環境について、中には光をストレスに感じるため暗く安心させなくてはならない個体もある。そのような個体には、光から隠れられるようなものを用意する、光を弱くする、光の向きを変える等で対応している。
- ・床材について、ヤシガラ、ペットシーツ、新聞紙、キッチンペーパー等、すべて一長一短である。ヤシガラは誤飲のリスクがあるが、糞を分解し臭いを抑えてくれるという利点がある。ヤシガラを誤飲してしまう個体もいるが、詰まって死んでしまった個体は経験上1匹もない。ペットシーツの場合は糞をした場合すべて取り替えなくてはならないため、維持管理の費用が多く掛かってしまうし、保水性は非常に高いが、湿らせておくのがよくないこともある。生体の好みによって、バークーチップ（木を碎いたもの）や、乾燥地帯を好む生体にはデザートサンド（砂漠の砂）を敷くこともある。
- ・逸走防止について、蓋をしているので逃げることは基本的がない。
- ・衛生管理について、床材の交換という意味では最低限月に1回以上は行っている。当店ではヤシガラ（有機質）を使っているため、糞尿やアンモニアの分解が最低限できており、月に1~2回床材交換していれば綺麗すぎるほどである。ペットシートで飼育している個体については、糞を確認したらその都度換えている。新聞紙を使用している場合は、交換の際に丸ごと捨て、容器を水洗いし乾燥させて使用している。
- ・健康管理については、餌を食べるかどうかと、脱皮がしっかりできているか（脱皮不全や脱皮の頻度）が、主な判断基準になる。温度管理ができており、いつでも新鮮な水が飲め、環境にも不満がなく、病気もなければ、自然と餌を食べてくれることがほとんどである。
- ・餌食いの管理においては、一部前回餌を食べなかった個体については値札を縦にして識別、管理している。続けて餌を食べなければ、何か環境が合っていないということが考えられるため、バックヤードに移して管理する。
- ・単数飼養、複数飼養について、基本的には単数で飼育している。
- ・展示の配置について、種類別に配置している。アクリルケースを使用しているため互いの様子が見える状況ではあるが、お互いを意識している様子はなく、仕切りを入れる必要はない。非常に神経質な個体であれば、周囲の状況がストレスとなって餌を食べなくなってしまうこともあるため、バックヤードでシェルターを用意して管理する。

	
ヘビ（幼体）のケースサイズ	ヘビ（成体）のケースサイズ
	
イベント時のプラケース	フトアゴヒゲトカゲ
	
ヒヨウモントカゲモドキ	ボールパイソン

爬虫類を扱うブリーダー兼ペットショップ（移動販売）【terra】

哺乳類／爬虫類ペットショップ・ブリーダー（展示販売会「BLACK OUT2023」「アクアリウム東京ネイチャー2023」の出展者

○施設の運営について

- ・店舗のあるペットショップであり繁殖もしている。
- ・取り扱いの爬虫類は、ヘビ全般、トカゲ（フトアゴヒゲトカゲやモニター、カメレオン、イグアナ）、カメ（ミズガメ、リクガメ、ヤマガメ）。
- ・繁殖している種はヘビ（カリフォルニアキングスネーク、パイソン、ボア）、ミズガメ、ハコガメ。
- ・ヘビは4～500匹（少ない時でも300匹）、トカゲは大体3～40匹、カメ（ミズガメ、リクガメ）は50匹ほど、イグアナは6匹。
- ・スタッフはオーナー含め3名。給餌の頻度も毎日ではなく、取り扱い数が多いがヘビが多いため管理しやすい。

○現状について（爬虫類）

【イベント時】

- ・年間のイベント出店回数は月2回、年20～25回程度。冬は冷えを防ぐためカイロを箱に貼って上から毛布を掛け、温度の調整をしている。
- ・イベント会場への移動手段は車。関東会場には7～8時間の移動となる。前日に搬入できるイベントは前日入りし、朝搬入後そのまま開催のイベントはそれに合わせて搬入。移動時から販売用のケージに入れて輸送し、そのまま販売する。
- ・爬虫類はイベントに合わせて餌をあげているため、イベント前日は、給水はするが給餌は不要。搬入日等は移動によるストレスで吐き戻しをする恐れがあるため給餌はできない。
- ・店舗出発時から帰宅までパッキングした状態は4日間ほど。この4日間で具合が悪くなっていたという事例はない。
- ・ヘビは4日間程度なら水がなくても問題ない。
- ・ヘビの種類によっては湿気が必要な子もいるが霧吹きで対応できる。
- トカゲは給水している。
- ・爬虫類のケージは、ヘビはとぐろを巻いて「キチキチではなくふわっと狭く」入る程度としている。ヘビの場合、中途半端に大きめな箱にすると落ち着かないため、動き回って鼻先が切れてしまう。とぐろを巻かない場合でも小さめのケージの方がじっとして落ちているため、小さめのものに入れている。爬虫類に関して、ケージを広くするメリットはない。
- ・基本的には1頭ずつ管理している。一方でリクガメ、ミズガメはプラケースにまとめて入れている。カメは大きさに合わせて動けるような頭数をプラケースに入れており、大きいものは1匹でないといけない。
- ・衛生環境について、ヘビは糞尿したときに、中に敷いているヤシガラや紙のチップを交換している。
- ・イベント中の給水、給餌について、イベントが始まる前と終わった後に給水する。ヘビに関しては水や餌をあげない。トカゲは始まる前か終わった後1日1回は水をあげているが

餌はあげない。カメに関して、ミズガメは基本餌をあげないが、リクガメは餌をあげている。

- ・爬虫類全般で見ると、イベント実施時間約 6~7 時間は給水がなくても基本的には問題ない。
- ・温度環境について、前日搬入の際は温度が低い時もあるためヒーターやホットカーペットをテーブルクロスの下や見えない場所において、低温に弱い生き物はそこで温めている。
- ・温度環境について、イベントによって会場の温度が低い時もあるが、その際は温度を上げるように主催者へ伝える。冬は 28 度に、夏は 26~27 度に設定してもらう。
- ・生体の健康状態について、ヘビに比べるとトカゲやカメは拒食が少ないため、気にしていない。ヘビは拒食期間がたまにあるため、イベント前に店舗で餌をあげるタイミングで食べていない個体は確認し、イベント時に連れて行かないようにしている。拒食のほかに、生体の健康状態を判断するポイントとして、カメは目をつぶっている時間が長い等の点がある。
- ・爬虫類は基本単独飼養でカメは複数飼養である。また、トカゲやイグアナ等についても、(大きい個体は一緒に入れられないが、) 小さな個体はケージの大きさに合わせて一緒に入れていたりする。
- ・展示方法は種類ごとに配置している。
- ・顧客のふれあいについて、種類によって応じている。ヒヨウモントカゲモドキは出して見てみたいという方が多いため、その場合は出す。イベント会場でヘビを出すことは基本的にあまりなく、できるだけ出さないようにしているが、店舗では出して見せることもある。

【イベント時以外】

- ・ケージの大きさについて、ヘビの場合、例えば 30 cm 以下の個体に対して 30cm × 30cm の大きいケージに入れると餌を食べなくなる。ヘビは動くときは動くが、普段はとぐろを巻いて小さくなっているため、広すぎると落ち着かない。フトアゴヒゲトカゲ等のトカゲでも、体長 10cm ないような個体を広めのケージに 1 匹だけ入れると餌を探せなかったりするため、基本的にケージサイズは少し小さめの方が良いと考えて管理している。
- ・コーンスネーク（体長 90cm）は、とぐろの倍くらいのサイズに入れている。また、ポールパイソン（体長 3m 超）に対して、ケージサイズは横 1m、奥行 60cm、高さ 45~50cm であり、一匹で飼育している。それで拒食にはならず、脱皮もできるため問題はない。
- ・ケースの高さについて、ヘビ全般登る個体は登るため、高さがあったほうが良い場合もある。ポールパイソンは樹上性ではないが、木を置いていたら登る個体もいる。
- ・トカゲは、ケージの縦及び横の長さは、頭胴長よりも大きくしている。また、トカゲは展示の方法や種類によって、木を斜めに置くこと（樹上性）やバスキングライトを設置することが必要であるため、高さは必要である。
- ・カメ、カメレオン、イグアナについて、大人の個体は、広めで動くことができるケースサイズで飼育している。生まれたての小さい個体は（頭胴長 15cm とすると）、大人用ケースに 6 匹ほど入れることができる。お客様に説明する際は「大きさに合わせてケージを広くしてください」と説明している。
- ・リクガメのケースの高さは、リクガメが上って逃げなければ低くてもよい。
- ・小さい個体であればあるほど、一緒にケースに入れている他の個体が餌を食べたことに誘

発されて食べたりするため、小さい個体を広いケースで単独で飼育することは拒食の原因になる。トカゲもリクガメも同様である。

- ・トカゲを単独飼養とするタイミングは雄雌によって違う。種類によっては雄同士になると喧嘩することもあるため、そういった喧嘩やトラブルがあると、個体が小さい時であっても少し別のケージに頭数を分けるようにしている。何cm等の基準を設けて、というよりは、日々観察しながら変えていっている。
- ・喧嘩をしない場合はそのまま複数飼養の場合もある。明らかに狭いと感じるまでは一緒に入れていることもあるが、体が大きくなってくると、どうしても分けざるを得ない。
- ・シェルターの要否について、ヘビの場合は広いケージサイズにシェルターを入れても、シェルターから出てこなくなることが多いだろう。
- ・シェルターサイズについて、繁殖用に3mのヘビも飼育しているが、それが入るサイズのシェルターはない。そういった点は工夫が必要である。
- ・衛生管理や健康管理はイベント時と同様である。
- ・繁殖可否は年数と大きさで判断する。コーンスネークは2年以上必要であると考えている。種類によって大きくなるヘビは3~5年かかることがある。

爬虫類を扱うブリーダー兼ペットショップ（移動販売）【爬虫類ブリーダーA】

哺乳類／爬虫類ペットショップ・ブリーダー（展示販売会「BLACK OUT2023」の出展者）

○施設の運営について

- ・2店舗あり、内1店舗では販売のみ、もう1店舗では販売と繁殖を行っている。
- ・取扱頭数は全て合わせて400頭程度。
- ・爬虫類はヘビ300匹前後（主にボールパイソン、ナミヘビ）、トカゲ100匹前後（主にアガマ、モニター、イグアナ、カメレオン）、カメ150匹前後（主にリクガメ、ミズガメ）。
- ・ミズガメ、トカゲは繁殖もしている。ヘビは基本輸入している。
- ・スタッフは3～4名。状況に応じてアルバイトスタッフを追加。同じ生体を毎日世話をわけではなく、生体を日別に分けて世話をしている。特にヘビなどの爬虫類の場合毎日給餌する必要がない。

○現状について（爬虫類）**【イベント時】**

- ・イベント参加は月に1～3回、年間12～30回程度。店舗のある大阪から東京のイベント会場までは車で輸送している。月に3回等頻繁に出店する際は生体の入替を行うようにしている。
- ・イベント時の流れについて、前日入りし、設置、土日に販売という流れである。前日入りの際はパッキングしたものを段ボールに詰め、カイロ等で温める。設置後は会場の暖房で温度を保つ。
- ・ケースサイズについて、トカゲであれば胴体がまっすぐになるサイズのケースを使用している。ヘビであればとぐろを巻くことができるサイズのケースを使用している。リクガメは、ベビーの場合40cm角プラケースに5～10匹程度入れる。広いケースに入れてしまうと、移送中に個体が暴れて口を擦ってしまうこともある。
- ・逸走防止について、出店前と2日間イベントの場合はイベントの中日（1日目）の夜等の人間が撤収するタイミングでは、生体を段ボールの中に詰めてしまっている。段ボールの中でカイロも入れて保管する。他の店ではブース内で出して並べている方もいるが、そういう業者では生体が逃げてしまっていることがある。
- ・リクガメは保温と給餌（野菜）を行う。ヘビ、トカゲは、イベント中に吐いてしまうこともあるため、イベントに出品するときは3～4日前から絶食させる。
- ・給水は霧吹きで行っている。種類によっては水を与えなくても問題ない種類もある。カメレオン等は脱水に弱いため、絶対に給水するようにしている。小型のヤモリ系も水分が必要である。湿度が必要なトカゲには床材を濡らして敷いている。ヘビは給水せずにそのまま販売している。
- ・衛生管理について、糞をしていたら床材を新しいものに交換する。絶食をしていても尿はしてしまう。
- ・健康管理について、輸入したてのトカゲやリクガメは連れて行かない。最低でも2～3週間は管理してから販売するようにしている。また、痩せている個体や動きが鈍い個体は連れて行かない。
- ・前泊の時に様子を見て状態が悪い個体については、保温をしっかりしつつブースでは客から見えない位置に隠す。

- ・健康状態を判断する上では、個体の目を見る。また、トカゲの場合、足が立っていない等の異常がある個体は様子を見る必要がある。
- ・単数・複数飼養について、ほとんど単独で飼育している。イグアナや多少成長したトカゲ等は2～3匹同じケースに入れて管理する。
- ・展示方法について、爬虫類の場合、温度が低くなると弱ってしまう個体はパネルヒーターを敷いて展示している。

【イベント時以外】

- ・ケースサイズについて、個体によって異なる。プラケースで飼育できる個体はプラケースで1匹ずつ飼育している。成長したトカゲは2匹で飼育しているケースもある。その他スポットや紫外線が必要なトカゲは大きめのケースで飼育している。
- ・ヘビの場合、プラケースのサイズはとぐろ3～4つ分の広さである。また、その中に、個体が中に入って全身が浸かれるサイズの水入れを入れている。
- ・水入れの水は、ヘビが中で糞をする場合もあるため、2～3日に1回交換している。
- ・トカゲ（単独飼養）の場合、プラケースのサイズは頭胴長の2倍程度である。樹上性の種類については中に木を立てている。その他必要な種類には紫外線ライトを設置している。
- ・シェルターは、ベビーや輸入したての個体等、まだ慣れていない個体に対しては個体を落ち着かせるために設置し、個体がある程度慣れてきたら外す。シェルターをずっと入れておくと、シェルターの中に生体が閉じこもってしまい、生体の状態が分かりにくくなってしまうためである。
- ・給餌給水の頻度はイベント時と同様である。
- ・衛生管理について、床材は1～2週間に1回交換する。キッチンペーパー等のペーパー類を敷いているトカゲの場合は、ペーパーを毎日交換する。
- ・床材について、トカゲにはヤシガラやキッチンペーパーを使用している。ヒョウモントカゲモドキはキッチンペーパーで管理している。
- ・健康管理について、状態が悪い個体はバックヤードで隔離して管理し、ノートに記載して認識するようにしている。
- ・繁殖可否について、ミズガメの場合年数や大きさで判断している。
- ・繁殖できる年数について、ミズガメの場合、最低でも生後3～5歳になるまでは待たなければ繁殖はできない。また、ある程度年を取ると、交尾をさせても産まなくなる。
- ・繁殖できるサイズについては、種ごとに概ね決まっている成長後の全長（頭から尻尾の先）に達したら繁殖可能と判断している。

爬虫類を扱うブリーダー（移動販売）【爬虫類ブリーダーB】

爬虫類ブリーダー（展示販売会「とんぶり市 2023」の出展者）

○現状について

- ・ヒヨウモントカゲモドキは適正温度内であればパネルヒーターと水入れがあればよく、シェルターを置く業者もいる。
- ・シェルターと同程度のサイズの食品カップに入っている状態でも、輸送には問題はない。広いケージにいるからといって尻尾を伸ばしているわけでもなく、むしろ、丸まって休むことが多い。食品カップは、あくまで休んでいる状態が、透明なので外から見えるというだけである。
- ・ヒヨウモントカゲモドキやヘビ、特にボールパイソンは一直線のまま休むのではなく、むしろボールの様に丸まっているので、ボールパイソンと呼ばれている。どんなに広いケージでも丸くなるのが特徴。縦になって休んでいることは殆ど無い。
- ・ヒヨウモントカゲモドキの販売開始の基準は8g以上としている。生後2-3か月以降で基準を満たしていて、食餌等に問題ない個体をイベントで販売している。以前までは10g以上にしていたが、イベント主催者側での基準体重に沿った形で販売している。
- ・1回のイベントによって展示できるスペースの大きさが変わると、大体50匹前後販売する。
- ・どのショップも食品カップ又はそれに近いものを使用している。食品カップには呼吸できるように空気穴がある。出展するにあたって生体に関しては数日前から絶食させないと、環境が変わった時に糞便を排泄、又は排泄せず滞留する場合がある。絶食させて糞便を出しきった状態でイベント会場へ輸送する。
- ・ヒヨウモントカゲモドキの給餌の頻度は生体の大きさによるが、幼体だと毎日、2~3日に1回、成体だと1週間や10日間開けての給餌になる。成体の場合、給水さえ継続すれば1-2週間は給餌なしでも問題ない個体もある。それ以上は試していないが、常時餌が取れるわけではない状況でも生きていける強い個体なので、給水・給餌を怠っても生死にすぐ直結するということではないが、あくまでも適正な飼育方法に則った上で飼育している。
- ・イベント展示時間（7時間程度）の間は水がなくても問題ないが、個体によっては適宜給水をさせている。イベント時は前泊をしており、キッチンペーパーを敷き霧吹きをしているため、前日までは水が飲めている状況。
- ・食品カップが使用できなくなる場合、その代用品が大きくなることにより必要以上に電車や車で揺れることが懸念される。運搬を考えると、中で生体が動く、急な揺れで反対側にぶつかることもありうるため、揺れの影響がないのは食品カップであると思う。
- ・使用する食品カップは生体が押し上げてもあかない構造になっている。ヒヨウモントカゲモドキの力では開けられない強度であるため、逃げたことは今まで一度もない。
- ・イベントで販売する個体の選定段階から体重を測り状態をみて判断している。前泊時に床材をキッチンペーパーからコースターに変更する際にも様子を見て、当日イベントに出せるものを選定している。
- ・ヒヨウモントカゲモドキはストレスがかかっている場合や警戒している場合はしっぽが浮いて、左右に揺れる状態になる。アダルト・セミアダルトの個体はイベント販売環境にすぐ慣れているのか食品カップの中で寝ている状態が多い。一方で、幼体はイベント販売経験がないため、四つん這いで立っていることがあり、ストレスまたは緊張をしている状態の可能性

がある。

- ・ヒョウモントカゲモドキのアダルトに関しては市販で販売されているブリードボックスのMサイズを使っている。小さいものはSサイズを使っている。幼体は更に小さい100円均一にあるような高さのあるタッパーに自身で空気穴をあけて使っている。
- ・水入れ、シェルター、床材はハスクチップを使っている。業者によってはキッチンペーパー、ソイル、赤土を使っている場合もある。
- ・ヒョウモントカゲモドキはケージの中に1匹で飼養している。基本的にはどのショップやブリーダーも単頭飼育である。
- ・繁殖は1ペアにつき1年に1回、クレストットゲッコー等は年1, 2回と聞くが、ヒョウモントカゲモドキは年1回。交配時の雄雌を一緒にする。一緒にケージで喧嘩をする場合は、交配が終わったらすぐに離す。ブリーダーによっては2、3日程度一緒に住まわせることもある。雄は毎年使っても問題ないが、雌は1年目使って2年目は休ませる方もいれば、1, 2年使って3年目に休ませる方もいる。
- ・清掃について、幼体は汚れた場合は毎日、汚れていない場合も1日おきには床材のキッチンペーパーを変えて霧吹きをしている。それ以外の個体は床材をハスクチップにしている。湿度を保ててそのまま捨てることができる。1週間に1, 2回は新しい床材に変えている。
- ・呼吸が荒い状態は病気の可能性があり、口を開けたままだと呼吸器系に疾患がある。神経障害は遺伝的なものだとホワイトアンドイエローまたはエニグマが混ざっていると障害が出やすい。遺伝性によって出る場合と環境によって出る場合がある。ビタミンD3が足りていない場合や水分不足になると、神経障害に似た症状が出て、尻尾の状態や糞の状態が変わる。前兆としては、食欲不振の状態や、伏し目がち、移動しないでじっとしていて動かないなどがある。
- ・生き餌ではコオロギやレッドローチなどをあげている。生き餌を投げ入れにしている場合やピンセットでやっている場合もある。コオロギによってはそのままにしておくと腐敗が進みにおいが出るため、一回の量で食べきれる量をあげるのが良い。

爬虫類を扱うブリーダー（移動販売）【ももれっぷ】

フクロモモンガ／爬虫類ブリーダー（展示販売会「とんぶり市 2023」の出展者）

○現状について

【イベント時】

- ・爬虫類は、食品カップの中に消臭用の床材を敷いて入れている。他のブリーダーもおそらく同じ間屋で仕入れた食品カップを使っていると思う。トカゲは兄弟3匹くらいを同じところに入れてライトを当てている。それ以外は基本1匹ずつ。ヘビはそっとしておいた方がいいのであまり触らない。
- ・ヘビは体重関係なく、生まれてすぐでもマウスを食べられるようになったらイベント販売する。トカゲは1か月以上はエサの食いつきの様子を見る。すぐにイベント販売することはない。
- ・爬虫類は輸送時に消化が悪くなるので1,2日前から絶食させている。湿度が必要なトカゲは連れていく前に霧吹きで食品カップの湿度をあげて、お水を垂らす。イベント中には加湿していない。
- ・爬虫類は、基本的に餌を食べない時には調子が悪いので、その様子を見て判断している。1週間前から注意して様子を見る。
- ・イベントの輸送時は爬虫類、哺乳類ごとに揺れない様に並べて入れている。長距離の時は途中で目視確認する。

【イベント以外】

- ・トカゲについて、小さい頃は3匹ずつ程度で同じケージに入れている。ヘビは噛みあったりすることが多いため、最初から1匹ずつ入れる。
- ・ケージは種類によって違うが、アオジタトカゲのケージは、なるべく幅が広くて高さがないようなものを使っている。湿度が必要な爬虫類種はバークチップで湿度を保つ。シェルターも用意している。
- ・トカゲとヘビで、シェルターの大きさを変えている。ヘビは床材を引いて潜れるようにしている。トカゲは洞窟みたいな形状のものを置いている。日中はトカゲに保温と紫外線ライトをあてている。
- ・適温については、インターネットの情報や、出身地の温度を参考にする。その上で個体には合わないと判断した際には適宜調整をおこなう。
- ・ヘビは糞をしたらすぐに気づいた時点で清掃する。ヘビはご飯をあげると糞をするので、床材を取り替える。毎回全部替えることはできないが、汚い部分だけとって、月に1度は、全部の床材を替えている。
- ・トカゲはさらっとしたペットシートを敷いたり、チップを入れている個体もいる。チップは汚いところだけとって、月1で全部替える。シートは吸水シートが水分を含んだら変える。高い湿度を必要とする爬虫類種は、チップの方が湿度を保ちやすい。
- ・湿度が必要なのは、メラウケアオジタトカゲである。
- ・爬虫類の繁殖機会は年1回で、冬くらいから冬眠させるが、それまでにエサを食べられなかった個体は繁殖しない判断とする。アオジタトカゲは母親を休ませたいため、一年空けたりもする。
- ・爬虫類の不健康な状態は、食欲不振で判断する。トカゲは、動きが鈍くなったり、目が開

かない、くしゃみの症状等が出る。

爬虫類を扱う展示販売会【BLACK OUT】

○施設の運営について

- ・年間のイベント回数について、BLACKOUTは年間概ね10回程度を目標とし、実際は8~9回程度。関東、関西、中部にて実施。出店者は、東京は120くらい、大阪は多い時で100、少ないと70程度、京都・名古屋は70程度、横浜は100前後、埼玉は120程度である。
- ・基本的にイベント日数は1日がほとんどであるが、年に1回だけ埼玉アリーナは2日。1日だと午前中搬入、夕方撤退のため実際のイベント開催時間は6時間程度。
- ・運営体制はアルバイトのスタッフで20~30名程度。
- ・イベントを始めたのは1999年である。当初は昆虫専門だったが、現在は爬虫類・哺乳類のイベントがメインである。

○現状について

- ・会場の温度については、爬虫類・哺乳類は種類が多くそれぞれ適切な環境は異なるため、中間的な温度(25~26°Cくらい)に設定する。個別の店舗とは異なり、来場客が少ない時と多い時で温度が変わる。特に天井の低い会場は空気の容量が少なく温度が変わりやすいため、出店者が上げたり下げたりの微調整をしている。基本的には25-26°Cを一番下の水準として見ながら、例えば30°Cを好む爬虫類には出店者に追加の暖房器具を用意してもらいうスポットで温度調整してもらっている。
- ・湿度は会場内では調整できないため、各出店者に任せている。
- ・会場からの騒音はないので特に対応していない。
- ・出店者との展示・販売時のルールの認識合わせについては、事前にマニュアル(適正な表示など、基本的な内容)を共有。
- ・輸送後～展示までの動物の健康・安全の管理について、輸送後に関しては、地震対策、転倒対策(3段以上の商品を積まない等)の周知を行っている。
- ・出店ブースの配置について、スピーカーの真下はBGMやアナウンスがうるさいため避ける。
- ・給水については、爬虫類の動物種ごとに特性(給水の頻度・やり方等)が異なるため出店者が管理していると思う。
- ・展示する際のケージサイズは哺乳類と爬虫類で大きく変わる。爬虫類は哺乳類とは全く別で、常に動き回ることによって代謝コントロールができず体力を浪費してしまう可能性もあるため、どちらかというと暗い巣の中でじっとしているパッキング・梱包の方法をとっており、見る人が見るとかわいそうに見えるが、きちんと生体の特性を理解しての陳列をしている。
- ・生体販売するときに動物愛護管理法に基づいた記載(品種等、繁殖者名、生年月日、所有日、購入先等)を徹底するように言っているが、守っていない業者が5%程度いる。イベント中に発見した場合は口頭で注意するが、それでも守れない場合は今後のBLACK OUTへの出店をお断りしている。
- ・出店業者の搬入は大半が車である。多くのイベントは土日に開催されており、次回は早くとも1週間後となり、その間、車中で動物を飼育し次の会場へ移動して参加ということは無いため土日に実施し閉場後は速やかに事業所へ戻り、その後生体のメンテナンスをする

ことが普通である。

- ・全体的には飼養管理基準を守れている業者がほとんどであるが、一部脱走等があると、業者はもちろんイベントとしても困るため、主催として厳重注意し、対策は常に考えている。
- ・爬虫類はパックから出してお客様に触っていただく販売方法もある。

爬虫類の哺乳類を扱う展示販売会【アクアリウム東京】

○イベントの運営について

- ・ 2023年10月28日 10:00~18:00、10月29日 10:00-17:00 新宿住友ビル

○現状について

- ・ 動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について
- ・ 出展者から、温度が低いと生体の動きが悪くなるという指摘があるため、27度前後に保てるようとしている。会場の設備によっては床暖房をつける。
- ・ 展示時のルールは以下の通り。

<展示販売主催者（アクアリウム東京）としての対応事項>

- ・ 持ち込む生き物の臭い・見た目・騒音に配慮し会場の許可を事前に得る。
- ・ 食店付近には臭いのする生き物（コモンマーモセット、スローロリス、バームシベット、ビントロング等の哺乳類）は配置しない。
- ・ 開催時間の1時間前に展示方法に問題がある出店者がいないか確認を行う。

<展示販売主催者（アクアリウム東京）としての遵守事項>

- ・ アニマルウェルフェアに配慮した飼育環境で展示販売を行う。
- ・ 過去のクレーム例を記載し、再発防止をする。

爬虫類を扱う展示販売会【とんぶり市 2023】

○イベントの運営について

- ・2023年10月1日 11:00~16:00 東京都立産業貿易センター東館

○現状について

- ・会場の騒音・振動の管理については、特段対策を取っていない。(取れないのが実情)
- ・一般的に来場者が不快と感じない程度の温度(25°C前後、湿度は成り行き)を会場側の空調で管理頂いている。その上で、各種類の特性に応じて出品者が保温器具(ホットスポット、パネルヒーター等)を準備している。
- ・出品者との展示・販売時のルールの認識合わせ、輸送後～展示までの動物の健康・安全の管理等については、申込時に弊社ホームページよりイベントの主旨を確認させ、同意の上、申し込みをさせる。
- ・初出品の方には申し込み後のやりとりで遵守事項を説明する。
- ・最後に各出品者に最終案内メールを送信し、情報共有及びルール遵守を指示している。
- ・違反が見つかった場合は、次回以降の出品を断るなど、厳しい措置を取ることにより、ルールを徹底している。
- ・法令遵守を条件に出品者に周知しており、23年間運営しているが、大きなトラブルはない。

爬虫類を扱うホームセンター内ペットショップ【ホームセンター内ペットショップA】○施設の運営について

- ・ 爬虫類の取り扱い種はヒョウモントカゲモドキ、カメ、イモリ等
- ・ スタッフ数は7名、うち6名がフルタイム勤務、1名がアルバイト勤務
- ・ ペットショップの運営体制としてはホームセンターから業務委託されている
- ・ 営業時間：9:30～20:00

○現状について

- ・ 動物はバックヤードに移すことではなく、展示のままの状態で管理されている。20時から翌朝8時半までが消灯時間となる。
- ・ 温度環境について、温度は26°C程度でエアコンで一括管理されている。ベビーの動物がいるときはヒーターパネルなどで温度を高めに管理する。ヒョウモントカゲモドキはケージの上にパネルヒーターを置いている。
- ・ 仕入れについては、同ホームセンター内の店舗が個々に仕入れ管理をしているため、店舗同士での連携はしていない。動物は卸業から仕入れており、届くパターンと取りに行くパターンの両方がある。
- ・ スタッフの知識について、会社のマニュアルがあり、エキゾチックアニマルが好きなスタッフが多く元々知識のある状態ではあるが、初心者にもレクチャーをしながら、業務を行っている。
- ・ 元旦は休みだが、スタッフが1名出勤する。
- ・ 動物の健康状態について、エキゾチックアニマルも診ることができる病院(獣医師5~6名)があり、事前に伝えるとエキゾチックアニマルに詳しい獣医師が来てくれる。猛禽類以外は診ることができるといわれている。また、日報で体調不良や投薬などを記録している。

	
ヒヨウモントカゲモドキ	ゼニカメ
	
ミシシッピニオイガメ	シリケンイモリ

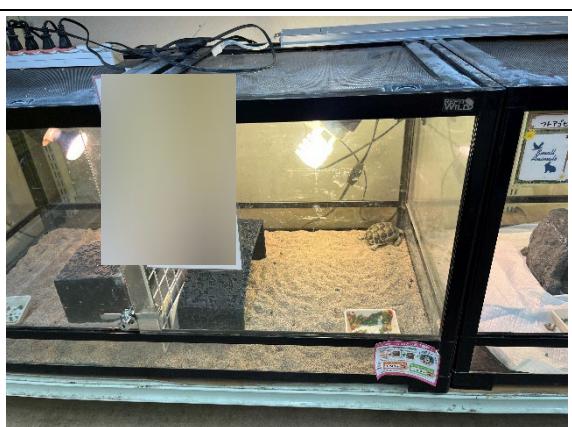
爬虫類を扱うホームセンター内ペットショップ【ペットプラザ（コーナン三鷹店）】

○施設の運営について

- ・フトアゴヒゲトカゲ1頭、ヒョウモントカゲモドキ2頭、コーンスネーク1頭、アフリカヌマヨコクビガメ1頭、カブトニオイガメ1頭、ヘルマンリクガメ1頭、ヨツユビリクガメ1頭、ギリシャリクガメ1頭、ゼニガメ2頭
- ・スタッフは全部で4名。基本的には1日1~2名で管理している。
- ・営業時間、販売時間：9：30～20：00

○現状について

- 1) 動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について
 - ・ケージサイズはコーンスネークの場合、とぐろの3~5倍の床面積が必要と顧客に説明している。また、高さはそこまで必要ないが、蓋は必須である。
 - ・ケージ内の基本的な設備として、シェルターと床材を入れている。その他種類に応じて、水入れやエサ皿、登れる木も入れている。
 - ・ホームセンター内の区切られた空間（部屋）に爬虫類、犬猫以外の小動物、鳥を展示している。
 - ・温度管理、照明管理について細かく2~3°Cの違いまでは管理していないが、必要な個体には紫外線ライトと保温球を設置している。夜は消灯しているが、エアコンは24時間つけているため寒くはない。エアコンの温度は、チンチラがいる場合は24~25°C、いない場合は26°Cに設定している。他にもより高い温度が必要な個体には紫外線ライトだけではなくケージ下にヒーターを付けることで対応している。
 - ・湿度について、爬虫類は乾燥してしまうため、水入れを入れることによって保湿をするようにしている。
 - ・触れ合いについて、哺乳類に比べると頻度はかなり減るが、リクガメに興味がある顧客には、リクガメを床に出て動く姿を見てもらっている。飼育に慣れている顧客に対しては、コーンスネークやフトアゴヒゲトカゲを渡し、触れ合いをしてもらうことはあるが、ホームセンターの場合慣れていない顧客が多いため、基本的には顧客には渡さずスタッフが動物を持つ形で、顧客に動物の体を触ってもらう。
 - ・清掃について、餌をあげるタイミングで清掃を兼ねて、糞尿を清掃する、ペットシーツを敷き直す程度である。
 - ・給餌頻度について、コーンスネークは3・4日～1週間に1回程度である。餌の種類は冷凍マウスを解凍して与えている。ヒョウモントカゲモドキは、たまに1日空くこともあるがほぼ毎日給餌している。餌の種類はコオロギや人工フードをあげている。生餌が苦手な顧客もいるため、できるだけ人工フードを食べることができるよう慣らしている。

	
ヒヨウモントカゲモドキ	フトアゴヒゲトカゲ
	
コーンスネーク	ギリシャリクガメ

爬虫類を扱う動物カフェ【はちゅカフェ】

○全般について

- ・現在取扱いの多い種はヒヨウモントカゲモドキである。中型のトカゲではフトアゴヒゲトカゲが一番多い。
- ・ここ2~3年で爬虫類の飼育人口は増えてきていると感じる。
- ・ホームセンター等で掃除ができていないなど粗悪な環境で飼育されている状況をみて、正しい情報を伝えていきたいと思い、カフェの店長として働き始めた。

○イベントや輸送について

- ・イベントは輸送のストレスがかかるだけでなく、空調が会場全体でなされるため、温度管理がきちんとされないという問題もある。また、売りたいがために遺伝子疾患のある種でも元気であると言って売る人もいる。
- ・食品カップについては良くないと考えている。ヒヨウモントカゲモドキであれば30cm程度のケースに入れたい。ヤモリ・トカゲは体を伸ばせる大きさ、ヘビはとぐろの2倍の大きさは必要。狭いケースに半日以上入れるのは良くない。

○はちゅカフェでのケージについて

- ・大型でおとなしい性格の個体は水槽等に入れずに室内で放し飼いもできる。もちろん、窓やドアを閉めるなど、屋外へ逸走しない部屋であることが前提。
- ・体の大きさに対してケースが小さいものについては、週に一度の定休日にケースの外に出して室内で放し飼いにしている。
- ・地上性ヘビは高さが必要ないので高さを低くし、底面を広めにしている。

○その他設備について

- ・床材は種によって使い分けている。湿度管理や清潔性保持がしやすい床材もある。ヘビやヒヨウモントカゲモドキはシェルターがあれば隠れられるため、キッチンペーパーでもストレスなく暮らせる。キッチンペーパーは掃除がしやすい。チップは餌の匂いがついてしまい、餌と間違って誤飲してしまうこともある。ヒヨウモントカゲモドキやフトアゴヒゲトカゲは本来砂地に生息しているが、砂は尿が浸透してしまい、菌が繁殖してしまったため、菌が原因で感染症にもなりやすい。また砂は埃が舞いやすいため、気管支系の病氣にもなりやすい。
- ・生態に合わせてレイアウトを変えている。樹上性の種には止まり木を入れている。

○飼育環境について

- ・餌の頻度について、草食の種には毎日、その他の種については週に2回程度にしている。欲しがるだけあげてしまうと肥満になってしまい、逆に良くない。
- ・清掃の仕方は床材によって異なる。チップの場合は糞を拾い、その部分を除菌・消毒する。ペットシーツの場合は糞をしたらその都度交換する。清潔性を保つなら毎日糞の掃除をした方が良い。

- ・ライトの照射、水替えは毎日行っている。
- ・水のきれいさの基準は人と爬虫類で異なる。爬虫類にとってきれいな水とはバクテリアがいる汚染されていない水である。水道水にバクテリアを殖やす薬剤を入れ、一日置いたものを使用している。
- ・ふれあいは爬虫類にとってストレスとなるため、一匹当たり 1 日 2 回までと上限を設けている。1 回あたりも 20~30 分程度とし、疲れが見えたなら終わるようにしている。

	
ヒヨウモントカゲモドキ	グリーンイグアナ
	
ギリシャリクガメ	セイブシシバナヘビ/コーンスネーク

爬虫類を扱う動物カフェ【Piccolo Zoo】

○施設の運営について

- ・飼養保管している哺乳類と爬虫類全て合わせると 1000 頭以上。
- ・販売用では、ヒョウモントカゲモドキ 300 匹、クレストeddゲッコー350 匹、コーンスネーク 10 匹、キングスネーク 10 匹、ボールパイソン 10 匹、ヘルマンリクガメ 3 匹。
- ・触れ合い用には、ヒョウモントカゲモドキ 5 匹、西アフリカトカゲモドキ 2 匹、コーンスネーク 2 匹、ボールパイソン 2 匹、コロンビアレインボーボア 1 匹、アシナシトカゲ 1 匹、フトアゴヒゲトカゲ 3 匹、ヒョウモンリクガメ 1 匹、グリーンイグアナ 1 匹、レッドテグー 1 匹、マングローブモニター 1 匹、クレストeddゲッコー 2 匹。
- ・繁殖は主にクレストeddゲッコー、ヒョウモントカゲモドキ。
- ・スタッフは全 3 名、常時 2 名。
- ・入場料：大人 1,500 円、小人 1,200 円
- ・営業時間：12:00~20:00、平日 180 分制、土日祝は 90 分制

○現状について（爬虫類）

- 1) 動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について
 - ・爬虫類に最も重要なのは、水、種類に合わせた温度・湿度、逸走防止である。
 - ・ケースの大きさについて、ヘビの場合、「とぐろの 2 倍以上あれば良い」という認識である。施設内ではとぐろの 3 倍程度の大きさのケースで飼育している個体もあるため、とぐろの 2~3 倍程度が良いだろう。木にとまるヘビであれば話は別だが、当店で扱うのは地上性のヘビであるため、高さは必要ない。
 - ・温度管理において、ヒーターは爬虫類全てに設置している。ヘビの場合はケースの下から、ヒョウモントカゲモドキの場合は上下から温めている。施設全体の室温は場所によって 26~29°C に設定している。
 - ・ボールパイソン、コーンスネークは 35°C、ボア系ベビーは 40°C 前後の管理が必要である。
 - ・紫外線と熱源機能が合わさっているライトを使用している個体もある。上に登って中からライトを壊してしまう個体はケースの外で上からライトを当て、そうでない個体はケースの中で上からライトを当てている。他にも、光が出ていないが温度が非常に高くなるライトもある。明るくならないため夜もつけっぱなしにすることができる。
 - ・ヘビの設備としては、丸まって入れるくらいの水入れが必要である。水入れも広すぎると落ち着かないため、きっちり入れる程度のサイズで問題ない。
 - ・シェルターは大きいケースであればあったほうが良い。当施設では、個体はケースの隅や水入れと壁の間に挟まる等で落ち着くことができるため、シェルターは入れていない。また、基本的に触れ合い施設であり、シェルターを入れると中に個体が引きこもってしまう、懐かなくなる、触られたときにびっくりしてしまうようになる。販売の際にはシェルターも合わせて販売するようにしている。
 - ・床材について、ヘビはペットシーツを使用している。ヘビの場合、糞をすると体に付着する場合があり、鱗に入ると炎症を起こしやすい。そのため、ペットシーツをこまめに交換することが一番安全である。虫がわきやすい、カビが発生しやすい床材を使うと、個体にもカビが付着してしまうため、ヘビの場合はペットシーツが一番良い。

- ・ヒョウモントカゲモドキにはノンダストドライペーパーを用いている。本来粉が目や鼻に入ってしまうためあまり良くはないが、ハリネズミや爬虫類に良いとされ流通している。
- ・清掃について、ペットシーツを糞尿で汚れたときに交換している。水も毎日交換している。
- ・単数・複数飼養について、爬虫類は基本的に単数で飼育している。
- ・展示の方法について、当店のイグアナはおとなしい個体を取り扱っており、猫とも隣同士で過ごすことができている。
- ・触れ合いについては、要望があった個体をケースから出して触れ合い方を教え、客に渡す。客が子供の場合は、動物を握ってしまう等の危険な状態にならないよう、スタッフが常に監視する。店舗内では哺乳類と爬虫類の両方を扱っているため、隣同士の客の触れ合い動物を近づけると危険な場合は、客に背中を向け合って座ってもらうようにしている。
- ・触れ合いについて、爬虫類は人慣れもする。ヒョウモントカゲモドキや、ボールパイソンの中には、触っても何しても怒らない、噛みつきもしないような個体もある。これらは毎日スタッフや客が触れ合いをしており、「危害を加えられない」と思っている。しかし、臆病な個体は触ると怖がってしまうため、そういう個体は触れ合いには使用しないよう（展示のみ）にしている。
- ・1日における触れ合いの時間は、客が多い時で1匹あたり2時間。客との触れ合いにおいて、1回あたり2~3分間ほど触られる機会が、10~20回ある。平日であれば、特定の個体を目当てに来る客もいるため、そういう方は個体を膝の上に置き、個体はその上で寝ることもある。ボールパイソン等は温かい場所を好むため、触れ合いによって手や膝の上で暖を取っている面もある。
- ・運動はそこまで必要ない。ヘビの場合、お腹が空いたら動き回るが、それ以外は基本的にじっとしており、筋力が落ちることもない。
- ・リクガメは紫外線と運動量が非常に重要である。リクガメはある程度の運動がなければ後ろ脚の筋肉が衰えてしまい、自分の甲羅を支えられなくなる。大きい個体であれば一日3km程度は歩かせる必要があり、当店のカメも店内を歩かせている。

	
ヒヨウモントカゲモドキ	フトアゴヒゲトカゲ
	
ボールパイソン	コーンスネーク
	
イグアナ	

爬虫類を扱う動物カフェ【横浜亜熱帯茶館】

○施設の運営について

- ・取り扱っている頭数は40頭以上。
- ・ミルクヘビ、コーンスネーク、イエアメガエル、アルゼンチンレッドテグー、オニプレートカゲ、オキナワシリケンイモリ、ギアナカイマントカゲ、ベルツノガエル、サソリドロガメ、パンケーキガメ、フトアゴヒゲトカゲ、ヒョウモントカゲモドキ、オオアオジタトカゲ、グリーンイグアナ、トッケイヤモリ、ヒョウモンガメ、ギリシアリクガメ、ヘルマンリクガメ、ケヅメリクガメ、ヨツユビリクガメ、インドホシガメ、クサガメ等。
- ・スタッフは基本的に店長1名。メンテナンス時に1名追加している。

○現状について（爬虫類）

- 1) 動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について
 - ・ケージサイズについて、ヘビの場合、とぐろ2つ分+全身が入る水入れがあれば良い。爬虫類は動き回ることが少なく、基本的には餌を食べてじっとしていることが多い。ケージサイズが狭いと思われる方もいるが、シェルターの中にすっぽり収まるような環境でないと落ち着かない、餌を見つけられない・食べないような個体もいるため、その個体に応じて対応する必要がある。よく動き回る個体は広めのケージに入れるが、狭いケージであっても一時的に外で運動させる等、工夫することができる。
 - ・ギアナカイマントカゲは水の中で生活する種類であるため、全身入ることができて、ある程度動くことのできる水槽に入れ、飼育している。尻尾をうねらせて泳ぐため、そういった動きができるようなサイズが必要である。
 - ・ケージの高さについて、コーンスネークは特に必要ない。イグアナ等樹上性の種類は立体的な活動が必要となるため、そういった種類が来た場合には高い段差のある木を入れて高さのあるケージで飼育する。
 - ・爬虫類を広いケージで飼う場合は、シェルターを入れてあげると個体にとっては安心である。狭いケージであれば、ケージ自体がシェルターと同じ役割を果たすため安心して過ごすことができる。特にヘビの場合、シェルターが肌に触れていないと中でぐるぐると回ってしまう、落ち着かずに餌を食べなくなる、ということもある。
 - ・イベント会場への輸送時の食品カップは最適解と言える。食品カップは個体の全身が壁に触れているためシェルターの機能も果たしており、周囲の温度変化にも左右されづらい。イベント会場への輸送時が食品カップである前提で、イベント会場で広いケージに移した場合も、環境の変化によって個体にストレスを与えてしまう。爬虫類の場合は、狭いケージで1週間程度飼育することも可能である。
 - ・ケージ内設備について、基本的には安心できるシェルターと新しい水があればよい。加えて必要な個体には紫外線ライトやヒーターを入れている。紫外線はトカゲの場合、健康のために必要である。基本的には日光浴が良いが、常に日光浴をさせられない場合は強めの紫外線ライトを当てている。
 - ・床材は、メンテナンス性の高さから土を使用している。ペットシーツであれば、排泄の際汚れたシーツを丸ごと取り替える必要があるが、土であれば汚れたところだけを交換し、数か月に1度土の総取り換えをすれば衛生面を保つことができる。

- ・給餌について、肉食爬虫類の場合、排泄の頻度に合わせて餌を与える。個体によって消化スピードも異なるため、例えば1週間に1回と決めて餌を与えすぎるとお腹の中で餌が腐ってしまう場合もある。肉食の爬虫類は基本的に動かないため、餌のあげすぎが注意であり、適宜個体の好みや状況に応じて餌の種類や頻度を調整している。草食、雑食の爬虫類については、営業時間中はいつでも食べられるような状況にし、営業時間外は片づけている。
- ・給水について、横浜亜熱帯茶館では霧吹きからしか水を飲まない個体はいないため、すべての個体に水入れを設置している。
- ・水の交換について、水入れの場合は毎日（少なくとも3日に1回）必要である。循環機能がついているものについては週に1回ほど交換している。また、中で排泄してしまう場合は見つけ次第隨時交換する。こまめに水の交換を行えば、狭いケージで飼育することができる場合もある。
- ・清掃は、排泄物を見つけたら取り除く。営業時間中は土を交換できないため、翌朝には取り除くようにしている。日常的なメンテナンスだけではなく、年に何回か水や土を総入れ替えする大規模なメンテナンスも行う。
- ・ギアナカイマントカゲは排泄を水槽の中で行うが、排泄物はバクテリアや、水槽の中の貝やイモリ、エビ、魚が綺麗にしてくれるため、水を循環させることで衛生面を維持できる。
- ・温度について、年間通じて25°Cプラスマイナス3°Cで調整している。個体によってはさらにヒーターを入れている。イグアナやカメなどにもヒーターを設置し温めている。
- ・逸走防止について、アルゼンチンレッドテグーやイグアナ等、肉食で危険な個体は施錠されたケージ内で飼育している。一方フトアゴヒゲトカゲやカメ、ギアナカイマントカゲ等人間に危害を加えない種類や活発に動き回る種類は店内に放しており、触れ合いも可能である。その他、オオアオジタトカゲやヒョウモントカゲモドキ等のジャンプ力のない種類は、ケージに蓋をすることなくケージの高さ（40cm）で逸走防止をしている。個体の逸走防止だけではなく外から人間が触れることがないよう、一部網を設置する、おもりを置く等の対応をしている種類もある。
- ・単数飼養、複数飼養について、本来爬虫類は1匹ずつ飼育することが最適であるが、カメとヒョウモントカゲモドキは複数で飼育している。
- ・ヒョウモントカゲモドキは全て雌個体であり、互いに喧嘩をしない個体であることが確認できたため複数頭一緒に飼育している。
- ・種類にもよるが、爬虫類は雄同士だと喧嘩してしまう場合がある。また、発情期がはっきりしない種類を雄雌一緒に飼育すると、抱卵状態が続いて雌個体の負担になってしまうため、基本的には雄雌分けて飼育する。
- ・カメは複数の種類を雄雌と一緒に飼育している。雄雌で繁殖をしても卵が別個体にすぐ食べられてしまい孵化できる環境はない。
- ・個体間の関係について、相性が悪い個体同士は離している。アルゼンチンレッドテグーを店内に放してしまうと、自分より小さいフトアゴヒゲトカゲ等を狩りの対象にするため、絶対に近づけないようにしている。カメとフトアゴヒゲトカゲ、ギアナカイマントカゲとイモリ等、一緒にいても問題ない個体同士は自由に同居している。
- ・繁殖可否に関して、爬虫類の場合は栄養状態が重要である。基本的には意図的に繁殖しよ

うと思わないと繁殖しないだろう。卵を管理しなければ卵から生まれることはない。

- ・健康管理について、かかりつけの獣医が何名か来店し、年に1回の健康診断に加え、何かあれば獣医に診てもらうようにしている。
- ・爬虫類は体調の変化をギリギリまで隠すことがあり、体調の悪化に気づいた時にはもう手遅れであることが多い。寄生虫が入っている、脱水を起こしている等の時には目の周りがくぼむ種類や、死ぬ間際に綺麗な色が出る種類もある。
- ・個体ごとの餌食いの状況は、日々の業務状況と合わせて帳簿で管理している。
- ・触れ合い時前後には手洗いや消毒をお願いしている。触れ合い時にスタッフや動物が怪我をした事例はない。人間に怪我をさせる恐れがある個体について触れ合いを行っていないだけでなく、触れ合い方法について「持ち上げるのではなく撫でるだけ」等と事前に説明している。触れ合いの様子は常にスタッフの視界に入っているようにしている。

	
ヒョウモントカゲモドキ	フトアゴヒゲトカゲ
	
ギアナカイマントカゲ	コーンスネーク
	
グリーンイグアナ	触れ合いエリア（カメ等）

爬虫類を扱う触れ合い施設【株式会社 ZOOKISS 施設】

○施設の運営について

- ・開館時間は 10:00～16:00
- ・開館中のスタッフは5人程度配置しており、内訳は犬のコーナーに専属で一人、その他室内巡回が二人、清掃一人、バックヤードに一人で運営。本日休暇のスタッフ含めると全部で10人程度である。
- ・清掃は全体が朝と夕方の二回、糞は隨時片付けている
- ・ケージ等に敷いている木のチップはほぼ毎日交換している。
- ・動物愛護センターが、年に一度立ち入り検査に来る。特定動物のビルマニシキヘビがいるため、そちらの確認でも一回来る。

○ふれあいについて

- ・施設内の動物は、触れ合いスタッフの触り方の説明を受けた後、基本的に触って良いが、だっこできるのはモルモットと犬のみ。
- ・ふれあいスケジュールを設定しており、スタッフが持つ動物をお客に触らせる等、動物とお客様の健康・安全を確保している。
- ・爬虫類については、触り方はお客様にはじめに説明する。またスタッフがお客様の手に乗せたり首にのせたりするが、お客様が自分で首にまいたり、つかんで手に乗せたりすることはない。時間は1回20分くらいで、人肌でヘビの体温が上がらないよう30分が限界と考える。飼養するヘビはコーンスネークとボールパイソンである。
- ・ヘビが触れ合いでストレスを感じていない状況についての判断は、体を伸ばしている、逃げない状態であると考えている。ただ、ヘビがとぐろを巻いて動かない場合は怖がっている場合もある。なお、ボールパイソンは外敵に襲われるとボールのように丸くなる場合がある。
- ・終生飼育を原則としているため、高齢や障害がある場合（断脚等）でも元気な場合は説明をしてふれあいには出している。触れ合いが負担になる状態の悪い動物は出さずバックヤードで終生飼養する。
- ・ふれあいはふれ「合い」であり、人と動物お互いにメリットがあるべき。動物側では餌がもらえる、なでてもらって気持ちがいいなど。ただ、爬虫類にはそこまでメリットはないかもしれない。せいぜい触ってもそこまで嫌ではない程度だろう。ただ、確実で安全なハンドリングができるほうが、状態が悪い際にすぐ気が付けるという健康管理のメリットはある。
- ・広いスペースに動物を放して、子供が触るようなやり方は狩猟のようなもので良くないと考えている。お互い近づくような方法が良いと思う。

○施設の動物のケア等について

- ・動物の種類に応じて顧問獣医が複数いるので、月に一度お願いして園に来てもらい、定期健診をしてもらっている。
- ・動物の餌は大事なので、献立については、どの種、どの個体に何をどれだけあげるか明示している。また、定期的にスタッフで勉強会を実施している。

○人畜共通感染症について

- ・動物の死因が不明の時、感染症等の疑いがある場合は獣医学大学の病理にお願いしている。
- ・観光地の施設であることもあり、人畜共通感染症についても気をつけている。もし感染していた場合対応できるよう獣医さんと連携している。
- ・施設の入口に消毒用のマットと手指消毒液を敷き、裏口は石灰をまいている。

○設備について

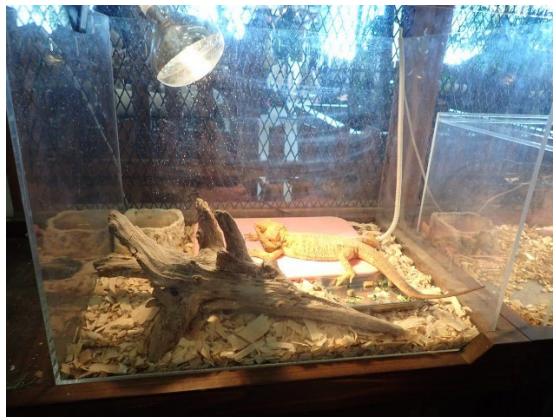
- ・爬虫類や寒さの苦手な動物については、下にヒーターを敷くか、上から白熱灯をあてている。
- ・動物の展示にはトレーニングの理論を活用している。

○飼養管理基準について

- ・ケージの中ですべて飼育する想定でケージサイズが決められると、当園のように入れたり出したりする飼い方では上手く当てはまらないため、画一的な基準だと対処しにくい。

○その他の懸念事項について

- ・アニマルカフェ等が増えているようだが、ビジネスとしての考え方は色々あるが、中心になるのは生き物なので、きちんと終生飼養すべき。出来る限り社員と同じように扱う、動物の尊厳を保つようにしてほしい。

	
ボールパイン	ビルマニシキヘビ
	
グリーンイグアナ	フトアゴヒゲトカゲ

爬虫類を扱う観光動物施設【観光動物施設 A】

○施設の運営について

- ・動物種：クサガメ、ミシシッピアカミミガメ、インドホシガメ、ボアコンストリクター、サルバトールモニター、アオダイショウ、ニホントカゲ、アカハライモリ、他多数哺乳類
- ・スタッフ数 30名程度

○現状について

- 1) 動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について
 - ・温度管理は動物毎に対応している。
 - ・カメの水はケージの下にある水抜きを使い2~3日に1回代えている。
 - ・爬虫類のライトは紫外線と赤外線を使っている。
 - ・樹上性のヘビには枝をおいている。

	
カメエリア	カメエリア
	
爬虫類エリア（室内）	爬虫類エリア（室内）
	
爬虫類エリア（室内）	爬虫類エリア（室内）

爬虫類を扱う移動動物園【移動動物園A】

○施設の運営について

- ・飼養施設：70種類程度、600頭程度
馬、ロバ、山羊、羊、エミュー、七面鳥、ガチョウ、アヒル、鴨、チャボ、ホロホロ鳥、モルモット、ウサギ、豚、オウム、サル、ねずみ、ヒヨコ、カメ、あらいぐま、シマリス、リスザル、ペンギン、カンガルー、ヘビ、インコ、フクロウ、ハリネズミ、犬、猫、チンチラ、アルパカ、など
- ・移動動物園：ポニー1頭、ヤギ2頭、ヒツジ2頭、ウサギ10羽、モルモット10匹、チンチラ1頭、ミニブタ1頭、マウス10匹、犬2頭、アオダイショウ1匹、カメ8匹、チャボ9話、アヒル・カモ4羽、ヒヨコ2ケース・26羽程度
- ・移動動物園時のスタッフ数：3名
- ・移動動物園は1日に2箇所程度を回ることが多い。受注先は平日の幼稚園・保育園がメインだが、土日のイベント会場などで行うこともある。
- ・現地調査当日のスケジュールは、1回目は朝8時過ぎから園内にて準備、園児向けに10~12時にふれあいを実施。2回目は12時半~13時半は外部向け（来年入園するご家族等）に実施。通常の給餌後にふれあいを開始している。

○現状について

- 1) 動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について

<移動動物園について>

- ・ふれあい時の注意点として、ふれあい前には誤った持ち方をしないこと、給餌方法を説明している。移動動物園を20年実施している中で動物の怪我や大きな事故はない。
- ・ふれあい時の運営体制については、1クラス10~15名ほどに対して園児の先生1名とスタッフ1名体制にし、クラスごとに交代で動物とふれあう。また、0歳児はベビーカーに乗せたままで、ふれあわせずに見せるだけの場合が多い（手をなめてしまう0歳児が多く、衛生面を考慮している）
- ・動物への配慮として、移動動物園に連れていく動物は体調を見ながらローテーションしている。糞便、ケガ、お尻の汚れを確認し、元気な個体を選ぶ。
- ・また、触れ合い時の餌の与えすぎには気を付けている。
- ・衛生面に関して、ふれあい後は手洗いするよう注意喚起しており、会場においても羽一つ落ちていないように園庭の掃除、消毒を行う。

<飼養施設について>

- ・飼育員は4~5名。現在の飼育員数で約600頭十分見ることができている。熟練した飼育員によって業務のルーティン化、役割分担化できており、具合が悪い動物、気を付けて見る必要がある動物については前日に日報等で共有している。
- ・温度管理について、冬は紫外線ランプを用意している。

	
カメ	アオダイショウ

爬虫類を扱う卸売【浅田鳥獣貿易株式会社】○施設の運営について

- ・営業時間は 09:00-18:00。
- ・爬虫類は、カメが 300 匹程度、トカゲ類が 400-500 匹程度、ヘビ類が 100 匹程度いる。

○現状について

- 1) 動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について
 - ・現行の飼養管理基準をできる限り遵守しているが、扱う種類や数量も多く、その習性も多岐にわたる為、飼養管理において最低限の基準をクリアする程度かと思う。
 - ・飼育に際してスペースの狭さにより死ぬことはほぼない。飼養管理は 1 ケージに 1 匹ずつ飼育する方が状態が一目瞭然であり、餌を食べていない等が把握できる。
 - ・食品カップで輸送されてきたヒョウモントカゲモドキ等は、販売の回転の速さと個体にとってのケージの入れ替え負荷等を踏まえ、その食品カップを活用し飼養保管している。呼吸用の穴の大きさは輸出業者によってまちまちである。
 - ・給餌給水は常時置いてあり、毎日 1 回以上変える。動物の種類に応じて隠れ家等の設置、換気扇及びエアコン等による温度管理、窓からの採光、小さなカメ等には必要に応じて UV ライト等を使用する。
 - ・全ての部屋に窓があり、18 時半くらいには電気をきって、外の光環境と変わらないようにしている。夜間の訪問はほとんどないため、消灯状態は維持されている。
 - ・逸走防止のため、ケージには動物の力で開かないようなロックがついている。施設は二重扉としている。夏に網戸を使うときは特に逸走に気を付けています。
 - ・衛生管理については、定期的な清掃を行っているが、清掃することで動物にストレスがかかる場合もあるので、対応が難しい。ゴキブリ等の害虫も殺虫剤等を用い、頻繁に対処を行っているが、なかなか追いつかないのが現状。
 - ・餌が死んでいたら撤去するようにしている。ミズガメの水は毎日取り換える。
 - ・健康管理については、基本的には日々の目視観察と、食物管理や温度管理で健康維持に努めている。調子が悪い時には隔離したりする。必要に応じて獣医に診察及び治療してもらう場合もあり、必要に応じて獣医より処方された薬を投薬する
 - ・個体別の帳簿管理の実態はない。健康管理は直接目視で状態を見て、餌の減り具合、糞の状態を見る。爬虫類であれば食欲不振に加え、目が閉じてしまうこと、動きが悪い、重さ、体のハリが無くなる等がある。
 - ・展示方法については、齧歯類、その他の哺乳類、食肉目、鳥類等、種類による展示位置の区分け、また食性や昼行性／夜行性等の習性に伴う展示場所への配慮も行っている。
 - ・飼養管理をどう取るかだが、最低限の餌・水・掃除であれば、100 匹いても半日からない。もう一步踏み込んで、健康管理までと言わると、きりがなくなってしまうので、どこまでを飼養管理とするか。数量が多い業態だが、朝 9 時から夕方 18 時まで 1 日 8 時間で 2~3 人で見ている。
 - ・爬虫類は室温は 29 度とちょっと暖かめにしていて、もう少し低くても良いと思うが、高い

方が代謝も良くなり動きも良くなる。幼体等の配慮が必要な個体であれば、室温の温度管理の他にヒーターを入れている。

- ・輸送については、飛行機の場合は羽田から現地につくまで計 6 時間もかからない。その間は入れっぱなしになる。出し入れの時は目視するし、客には受け取ったら報告いただくようにしており、確認書を運用しているので、飛行機はほぼ事故もない。あまり早くから梱包しそうないようにして、お客様にはなるべく早く開封するように依頼している。

	
トカゲ	リクガメの幼体
	
トカゲ	ヤモリ
	
全体	カメレオン

爬虫類を扱う卸売【川原鳥獣貿易株式会社】

○施設の運営について

- ・種類は約 230 種（以上）。頭数は 1500 頭羽（以上）。
- ・爬虫類は、カメやヘビ等。
- ・スタッフは 14 名おり、1 日 9 名は必ずいるようにしている。学生が実習で来ているときは手伝ってくれる。
- ・建物ごとに職員の担当が決まっており、休みの職員は前日に情報共有している。
- ・90%以上が国内での動物園とのやり取りや繁殖。現在は海外からの輸入はない。

○現状について

- 1) 動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について
 - ・単数飼養、複数飼養について、動物によって分けており、中には違う動物種同士で飼育している場合もある。群れで生活する動物は数頭で複数飼養している。
 - ・給餌、給水、清掃は毎日行っている。
 - ・爬虫類の温度や光環境については、暖房設備によって対応している。
 - ・健康管理について、掃除しながら糞便や食欲の状態を判断し、対処している。自治体の指示に従い、毎日担当ごとに記録を付けている。病気の個体がいれば獣医師が処置する。消毒は月に 1 回行う。



爬虫類を扱う卸売【レップジャパン】**○施設の運営について**

- ・取り扱い種は200種類程度。（多い時で400種類程度）1種類100頭程度輸入されるため、20,000頭ほど管理している。
- ・輸送時は100%空輸である。輸送時のケースは規定通りのものを使用している。
- ・スタッフは全部で5名。視察当日は3名で管理（2名休み）。

○現状について（爬虫類）

- 1) 動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について
 - ・毎日必ずやる作業は生死や健康状態の確認、汚物の確認、水の交換である。カメの水も、アンモニアの発生や、飲み水にヌメリがついてしまうことを防ぐため、水の交換は毎日やったほうが良い。
 - ・ケージのサイズや設備について、トカゲは頭胴長の1.2倍、カメであれば甲羅の面積の3倍、ヘビであればとぐろの1.5~2倍の広さがあれば最低限よい。レップジャパンではとぐろの3~4倍の広さを用意しているため、とぐろの2~4倍程度の広さが良い。広いケージに小さなヘビを入れてしまうと乾燥しすぎてしまい管理が難しい。
 - ・ヘビの場合、高さがいらないが、シェルターを入れる、床材を入れて底上げをする等の理由で、高さのある容器（高さ20cm）に入れている個体もある。
 - ・シェルターについて、シェルターを入れることで挟み込み事故が起こり、足や尻尾が取れてしまう可能性、爪とびの可能性があるため、工夫が必要である。
 - ・シェルターの有無は種類によって変わる。穴の中や砂を掘って住んでいる種類については、シェルターを入れ湿度を高め、湿っている砂の中のような環境を作る必要がある種類もある。
 - ・トカゲの中でも水面の上を走る種類もあり、ケースが広いと走り抜けようとして壁に激突し怪我をしてしまうため、怪我を防ぐためにケースの左右をプラダンなどで目隠ししている。
 - ・給餌頻度は種類や個体に応じて異なる。ヘビは基本的に1~2週間に1回給餌しており、中には半年に20回程度しか食べない個体もある。リクガメには給餌の際にビタミンD3を含むカルシウムパウダーを添加する等、給餌による紫外線吸収への工夫をしている。
 - ・給水は種類や個体に応じて異なるが、ヘビには、頭を入れて水浴びができる、中でとぐろを巻いて綺麗に収まることのできる等のような水入れを設置している。トカゲには水入れや霧吹きによって対応している。カメには種類によって水入れや水浴の時間を設けている。カメの中でも弱酸性の水を好む種類は、水カビや皮膚病を防ぐため2時間程度の水浴後、新聞紙の上で乾燥させる等の工夫をしている。
 - ・温度管理について、夏は冷房の26°C、冬は冷房で28°Cに設定している。ライトと遠赤外線のパネルヒーターで調整しており、ライトをつけていないときは24~25°Cになる。昼と夜の温度差は10°C程度がよい。
 - ・ヘビについて、ケースの奥半分がヒーターに当たるようにしており、温まりたければ個体

が自分で奥（ヒーターに当たっている部分）に移動し、そうでなければ自分で手前（ヒーターが当たらない部分）に移動できるように設置している。水入れ（手前に設置）も活用して涼をとる等、個体が自分で温度調節ができるような設備としている。中には、ヒーターの上に段ボールやケースの蓋を置いてかさ上げすることで熱さを調節している種類もある。

- ・床材は種類によって変えている。地中に潜るため湿度が求められる種類には、湿度を少しでも補うために新聞紙ではなくヤシガラを使っている場合もある。
- ・湿度について、ボールパイソン等、中には蓋をするだけでは乾燥してしまうため蓋に新聞紙を挟み、ケース内で多少蒸らす必要がある種類もある。
- ・健康管理について、個体の色つやと反応、トカゲやカメの場合は顔色、ヘビはとぐろの巻き方や待機の体勢等で健康状態を判断している。ヘビは脱皮前につやがないということもあり、ケースバイケースである。
- ・単数飼養、複数飼養について、ヘビ全般やヒヨウモントカゲモドキは1匹ずつ飼育している。カメやトカゲは習性によって複数飼養の種類もある。一部のカメやイグアナ等、他の個体につられて餌を食べる種類は複数飼養にしており、餌を待ち伏せるタイプの繊細な種類は単数で飼育している。
- ・逸走防止は、各ケースに爪がついている、もしくは棚に入れて保管しているため問題ない。
- ・光環境について、日光浴を過剰にすることは危険である。冬であれば30分から1時間程度、夏であれば5分から10分日光浴をして紫外線を浴びれば、1日の紫外線要求量としては十分である。
- ・寄生虫の恐れのある種類は、他の種類と接触しないようケースに印をつけて認識、感染症を防いでいる。

	
ホオアカドロガメ	カメ (単数飼養)
	
ヒヨウモントカゲモドキ	ツナギトゲオイグアナ
	
ボールパイソン	コーンスネーク